TEN

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊号 2024

巻頭 新しいNEW CROWNの刊行に寄せて

02 令和7年度版 NEW CROWNの改訂のポイント

16 令和7年度版 NEW CROWNの指導例

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則って作成しております。

SANSEIDO

新しい *NEW CROWN* の刊行に寄せて

NEW CROWN 代表著者　工藤 洋路（玉川大学）

昔も今も *"NEW" CROWN*

NEW CROWN は、今から50年近く前の昭和53年（1978年）に初版が刊行され、その後、何度も改訂を重ねてきました。改訂のたびに、新しい題材を取り入れたり、単元の構成を変えたり、言語活動を充実させたりするなどして、その時代に合った教科書、あるいは時代の少し先を行く教科書を目指して作られてきました。とはいえ、中学生が学ぶものとして価値があるものであれば、学習指導要領が変わっても、また、生徒の学習形態が変わっても、決して教科書から消えることはありませんでした。

NEW CROWN は、常に新しいことに挑戦し、追い続けることを厭わない教科書でもあります。それは一つに、編纂に携わる先生たちが、これからの英語教育のあるべき姿を、常に前向きに、そして具体的に思い描いているからです。もう一つは、*NEW CROWN* という教科書の名前にあります。*"NEW"* という名前を授けられたからこそ、この教科書は、何か新しいものを備えている必要があります。改訂のたびに、意識的に、そして無意識的に、この名前の持つ意味が反映された教科書づくりが行われています。

生成AIなどのテクノロジーが発達した現代においても、教科書をデザインするのは、AIではなく「人」なのです。令和7年度版*NEW CROWN* も、幾度となく議論を重ね、何度も英文を書き直し、細かな修正を施しながら、ここに完成しました。この教科書を手にする先生や生徒たちに、作り手の思いとともに、書名にある *"NEW"* の意味を感じ取ってもらえると嬉しく思います。

題材の*NEW CROWN*

新しい*NEW CROWN* を編纂するにあたって、時間をかけて議論したものの一つに題材があります。歴史的に*NEW CROWN* では、取り上げる題材を、英語の技能を育むことと同じ程度に重視してきました。そのため、どの時代の*NEW CROWN* においても、中学生が自分の世界を広げ、多様性を認め合い、物事を深く考えるための題材を提供しています。代表的なものの一つとして、キング牧師の『I Have a Dream』があります。今回の改訂では、この題材の存続について様々な意見が出ました。結論から言えば、次のような理由から、Lesson（主単元）ではなく、Reading Lesson（読み物）として位置づけることになりました。

キング牧師の題材は、主に1950～1960年代のできごとであり、中学生だけでなく、先生たちの多くも、その時代を体験しているわけではない。それを踏まえると、この題材は、歴史的な事実として人権問題を「知る」ことにフォーカスすることになるが、それでも十分価値のあるものと言える。そこで、読むための素材として残したい。

こう考えた背景には、キング牧師の題材自体の価値は高いけれども、その題材にアプローチするための導入教材を探すことや、生徒の興味や関心を喚起することが、時代の変化とともに難しくなってきているという先生たちの感覚がありました。実際、これまで拝見した授業でも、例えば10年前であれば、多くのメディアが取り上げ、生徒も耳にしたことがある "Black Lives Matter" を導入として取り上げ、そこからキング牧師の『I Have a Dream』に繋げていくという方法が見られました。また数年前に、「新型コロナウイルスは中国が発生源と考えられる」という情報が世界中に広まった際、欧米諸国に滞在するアジア系の人々が暴行を受けるという問題が起こり、それを単元の導入として取り上げたという授業事例もありました。

このように、生徒にとって身近な題材を先生が用意し、授業の導入に用いることは理想的です。しかしながら、身近かつ取り上げる意味のある事例は、いつも存在しているわけではありません。そこで、今回の改訂では、キング牧師の『I Have a Dream』は、主単元の中心になる題材として据えるのではなく、そのできごとを歴史的な事実として知ることにフォーカスした、読むための素材という位置づけに変更することにしました。

一方で、3年Lesson 6に"Being Fair" というキング牧師につながる単元を新たに設定し、人権問題を学ぶ機会を提供しています。この単元では、Partの中で、左利きの人が使う道具の話や、食材にアレルギーがある人の話を聞いたり、読んだりして、最後のGoal Activityで*What is "Fairness?* というタイトルの英文を読みます。これらは、遠く離れた場所で起こったできごとではなく、何十年も前の話でもありません。中学生にとっては身近なことであり、公平・平等とは何かを考える機会となることが期待できます。

もちろん、身近であるがために、題材が扱いにくいと感じる先生もいるでしょう。教室には、左利きであることで心無いことを言われた生徒や、給食のメニューにアレルギー食材が入っていないか不安に感じている生徒がいるかもしれません。先生たちには、こうした生徒たちへの配慮をしていただくことになりますが、実際にある身近なことを英語で表現することで、意味（伝えたいこと）と言語（英語の表現）が結びつき、記憶に定着しやすくなると考えられるため、この新しい題材をぜひ有意義に使っていただけることを期待しています。

新しいNEW CROWN の構成

令和7年度版NEW CROWN のもう一つの改訂のポイントは単元構成です。「練習」だけでなく、「活用」を促す活動を、単元の序盤から配置しました。外国語の習得方法はさまざまに考えられますが、PPP (Presentation - Practice - Production)で展開する指導を受けた場合、活用するために必要な言語材料をいったんしっかりと練習するという段階を経験します。外国語の習得に練習は大切ですが、「どの程度練習をすればよいか?」という疑問に対して、明確な答えを見出すことは困難です。その理由は、外国語は練習するだけでなく、活用することで身につくものだからです。したがって、練習しつつ、活用する段階（≒言語活動を行う段階）を早くから取り入れることで、練習と活用の相互作用によって、英語の習得を促進することが必要になります。今回の改訂では、練習と活用の段階を分けるのではなく、単元を通して、両者を同時進行的に行えるように設計しました。新しいNEW CROWN では、「まず使ってみる、そしてもっとうまくいくように練習する」とか、「習ったらすぐに使ってみる、使ってみてうまくいかなかったら練習する」というような、フレキシブルな学習スタイルを実現することができます。

「練習」と「活用」を同時進行的に行う
新しいNEW CROWNのレッスン構成

「まず使ってみる」を体現しているものの一つは、Partの冒頭に配置されたSmall Talkです。ここでは、新しい文法事項や語彙などを学ばなくても、それまでに学習した言語材料を使って取り組むことができるようなテーマが設定されています。Small Talk はその名の通り、規模が大きい活動ではないので、時間をかけて準備する必要のない、即興で話す活動となっています。即興で話すことが、あまり得意ではない生徒もいるかもしれません。しかし、それは逆に言えば、このSmall Talkが「もっと上手に話せるようになりたい」「話すために必要な知識や技能を身につけたい」と思うきっかけになるということです。

このきっかけ作りがひと段落したら、次は、新しい文法事項を学ぶScene 1のCheckとExerciseに進みます。ここでは、文法事項のルールに気づき、その文法事項を使った文を聞いたり、話したり、書いたりすることで、新しい知識及び技能を学びます。

知識及び技能を「生きて働く」ものにするためには、思考、判断、表現する中で活用することが必要です。新しい教科書では、この活用の機会を、単元末のGoal Activityの言語活動だけでなく、Partの段階から、Small Talk、Listen & Read、Think about Yourself などを設定することで、Partが知識及び技能を練習する場となるだけでなく、活用するための重要な位置づけにもなっています。

生徒が楽しめる教科書

ここまで少し堅い話が続いていますので、生徒の立場になって、楽しい教科書はどのようなものかをカジュアルに考えてみます。先生たちからよく聞く話の一つは、生徒たちは教科書の登場人物について、あれこれ想像を巡らしているということです。主要な人物たちは、3年間一緒に英語の勉強をするパートナー的な役割を担います。教科書紙面ではイラストで描かれていますが、二次元コード等から実写の動画が見られるものもあります。その際、イラストの人物と実写版の配役のモデルの類似点や相違点を楽しむ生徒もいるようです。

イラストにも実写にも共通して言えますが、英語を話す同世代のキャラクターに親近感を持ったり、憧れたりすることは、生徒の英語学習への意欲的な取り組みに繋がります。例えば、ダイアローグを扱う場合は、ある程度音読ができるようになった後に、ダイアローグの続きを考えて、スキットを演じる活動を行うことができます。その際、登場人物に対して愛着を持っていれば、生徒たちはこの活動に意欲的に取り組むでしょう。

新しいNEW CROWNは、キャラクターとの学びが活きるように、ストーリーを大切にしました。Partの左ページにScene 1、右ページにScene 2が配置され、それぞれストーリーが繋がっています。また、Part間でもストーリーが繋がっていて、登場人物たちが個性を発揮しながら、話が展開していきます。教科書を作る際には、キャラクターの出身地だけでなく、性格や趣味、家族構成などのプロフィールを決め、それらを教科書の随所にさりげなく組み込んであります。全ての情報が明示されているわけではありませんので、生徒たちと一緒に想像を膨らませながら味付けをし、キャラクターを活かした楽しい授業が行われることを期待しています。

生成AI時代の英語教育

最後にまた堅い話に戻りますが、昨今の教育を考える際に、2022年に公開されたChatGPTをはじめとする生成AIに触れないわけにはいきません。ChatGPTなどの生成AIは、英作文の課題をプロンプトとして入力すれば、内容を考え、指定の言語で即座に出力してくれます。こんなに便利な道具を生徒が使い始めると、学習にならないのではないかと考える先生も多いはずです。実際に、文部科学省が作成した『生成AIの利用に関するガイドライン』では、中学生に対してはかなり限定的な使い方しか認めておらず、英語に関しては、英会話の相手として使うことしか推奨されていません。

新しいNEW CROWN では、生成AIを使うことを想定した活動は組み込まれていません。しかしながら、将来、生成AIを使うことになった際に必要なスキルを育成することは、生成AIを使わなくても可能です。まだ見えぬ遠い未来に、創造的かつ意欲的に、そして幸福に生きていける人間を育てる教育を、英語の授業を通して実践していくことが大切であると考えています。

小中連携

小学校での学びを引き継ぐ小中連携パート

酒井 英樹
（信州大学）

令和7年度版*NEW CROWN* 小中連携パート

Starter 1〜4
やり取りを通しておたがいを知る

トピック
1 好きなもの
2 好きな人物
3 一日の生活
4 行きたい場所

Starter 5〜6
音・文字をふり返る

My Dictionary
絵辞典

4〜5月 **Lesson 1** About Me → **Words & Sounds 1**

6月〜 **Lesson 2** My Hero → **Words & Sounds 2**

6〜7月 **Lesson 3** My Treasure

7月〜 **Lesson 4** My Summer Plans

接続期の改訂のポイント

令和7年度版*NEW CROWN*（以下、*07NC*）の小中連携パートは、1年のStarter 1〜6、My Dictionary、Lesson 1〜4、Words & Soundsから構成される。小学校での学びを引き継ぎながら、発展的に中学校の学びにつなげていく役割を担っている。改訂のポイントは、次の通りである。

①小学校での学び方を活かした構成になっている

小学校の外国語活動・外国語では、「聞くこと」と「話すこと」を中心として、簡単な語句や基本的な表現を用いて聞いたり、やり取りしたり、発表したりする力を身につけてくる。教師のモデルや教科書の音声・動画を視聴しながら、語句や表現の意味を把握したり、その使い方に気づいたりする。そして、自分のことなどについて話す活動を行っている。

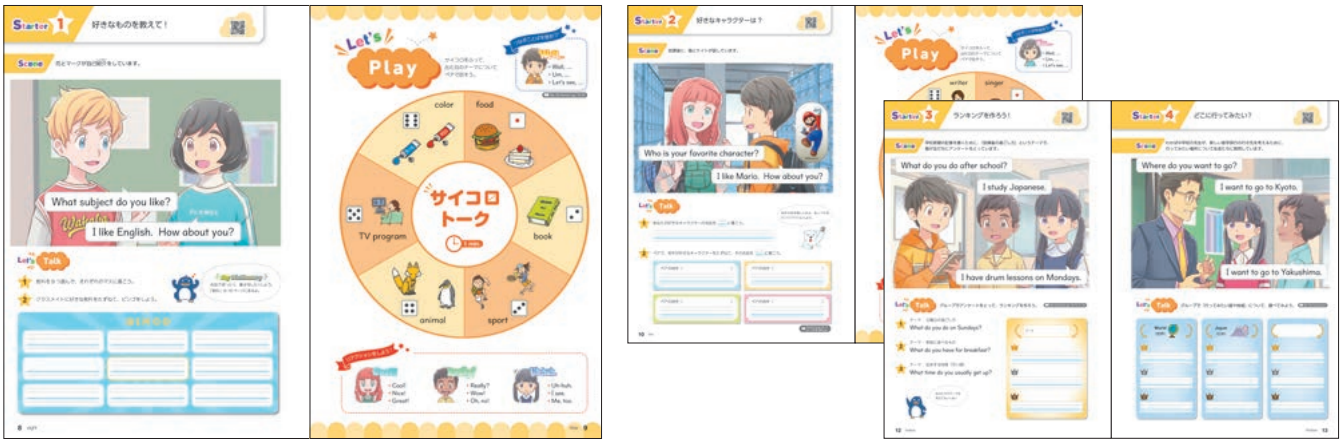
また、「読むこと」と「書くこと」については、英語の大文字と小文字を書けるように指導されているほか、音声などで十分に慣れ親しんだ語句や表現を読んだり、書き写したり、例文を参考に文を書くという言語活動を体験してくる。つまり、「聞くこと」から「話すこと」、「音声」から「文字」という流れで英語を学んでくる。この小学校での学び方を*07NC*の小中連携パートにおいても引き継ぎ、すべてのコーナーにおいて、まず「聞くこと」から始め、自分のことなどについてやり取りする活動につなげている。また、Lessonにおいては、そこからさらに読んだり、書いたりする活動へと発展させている。この構成により、中学校の学びに向けてスムーズに進められるように設計している。

②小学校で学ぶ語句や表現を網羅的に扱っている

語彙に関しては、小学校では600〜700語程度を指導することになっている。この語彙には、聞いたり、読んだりして意味が理解できる「受容語彙」と、話したり、書いたりして表現できる「発信語彙」の両方を含む。生徒によっては、聞けばわかる語であっても、発話する際に使えない語もある。*07NC*の小中連携パートでは、小学校での学びをふり返りながら、くり返し取り組めるようになっているため、生徒の言語活動の様子から、生徒がどの程度の語彙力があるのかを判断し、小学校での学びを踏まえて指導することができる。

表現に関しては、1年生の1学期までの間に、小学校で扱われる表現に少なくとも一度はふれられるように配慮している。そのため、Lesson 4では、過去を表す表現（I went to [ate / saw / enjoyed] ....）や、したいことを表す表現（I want to go to [eat / see] ....）を扱っているが、この段階ではチャンクとしてこれらの表現をふり返ることを意図しており、過去形やto不定詞はそれぞれ1年Lesson 7〜8、2年Lesson 3などで改めて指導する。

Starter 1〜4：やり取りを通しておたがいのことを知り合う



Starter 1〜4には、「たくさんの人と話して、おたがいのことを知ろう！」という目的が設定されている。生徒がクラスメイトと出会い、英語を使って楽しくやり取りし、おたがいのことをより詳しく知ることを通して、小学校での学びをふり返る。トークテーマは、生徒が意欲的に会話を進められるようなものを選択している。また、ビンゴ、サイコロトーク、ランキング作りといったゲーム要素のあるアクティビティーを用意した。これらのやり取りの活動を通して、小学校でふれてきた語句や表現を思い起こさせたい。

Starter 1　好きなもの（教科、色、食べ物、スポーツ、動物など）
Starter 2　好きな人物（キャラクター、歌手、スポーツ選手など）
Starter 3　一日の生活（放課後の過ごし方、日曜日の過ごし方、朝食に食べるもの、起床する時間）
Starter 4　行ってみたい場所（国や地域）

活動に取り組みやすくするための工夫もたくさんある。例えば、活動の前にSceneが用意されているが、教科書のキャラクターたちが同じテーマで会話しているのを聞くことができる。また、サイコロトークでは、テーマが文字とイラストで提示されており、何について話すのか推測できるようにしている。加えて、小学校でも使っていたつなぎことば（Well. / Um. / Let's see.）やあいづち表現（Cool! / Really? / Uh-huh.など）をいつでも確認できるように配置している。

なお、実際にこれらの活動を行ってみると、小学校で使っていた教科書や、小学校で経験してきた言語活動によって、生徒の習熟の程度に違いが見られるかもしれない。聞けばわかる語句や表現であっても、いざ話そうとすると、すらすら言えないものもあるだろう。目の前の生徒たちにどのような支援が必要かを考え、判断するためにこのStarterを活用してほしい。

また、Starter 1〜4はやり取りを中心とした活動だが、アクティビティーの一環として、My Dictionaryから単語を書き写したり、人の名前を書いたりするところがある。そのときの生徒たちの様子や、実際に書いたものを見て、Starter 5〜6での文字指導に生かしたい。

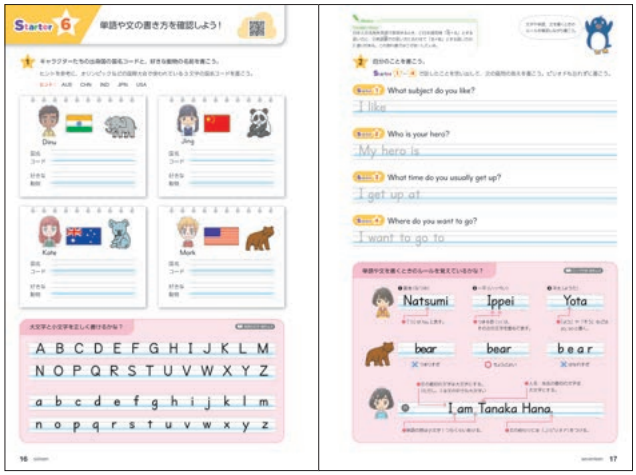
My Dictionary：小学校で定番の絵辞典を中学校でも

My Dictionaryでは、「教科」「食べ物」「スポーツ」「動物」などのカテゴリーごとに、語句・表現がイラストとともに提示されている。小学校の教科書で使用頻度の高いものや、小中連携パート（StarterやLesson 1〜4）で使える語句・表現を約400個選んでいる。

Starterだけでなく、Lessonでの学びに入ったあともくり返し活用できるように、紙面の外側を10mmカットして指に引っかかりやすくしている。これらの語句や表現は、この段階で一度に、また短期間で学習するのではなく、1年間を通してくり返し活用する中で身につけられるようにしたい。

なお、小学校の絵辞典では、書き写す際に文字の高さや長さを意識させやすくするために、単語を4線上に配置していることが多い。このMy Dictionaryではあえて4線を入れずに表示し、生徒が書き写したりするときの様子から実態を把握し、適宜、その後の文字指導につなげられるようにしている。

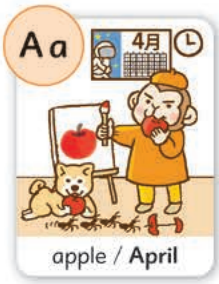
Starter 5〜6：音と文字の関係や、英語の書き方をふり返る



Starter 5

小学校では、英語の基本的な音（子音や母音、強勢など）を指導することになっている。評価はしなくてよいことになっているが、音を聞いてどの文字であるか判断したり、文字を見てその読み方（名称読み）を発音したりする力を身につけてくる。Starter 5では、アルファベットの一覧や絵カード、チャンツなどを使って、英語の音と文字をふり返る。このページを通して、生徒がどの程度英語の音と文字について理解しているかをみることができる。

絵カードのイラストには、下部に表記している単語の他に、その文字で始まる語が隠れている。例えば、A-aであれば、appleとApril以外に、ant, astronautなども描かれている。これらの単語を探す中で、小学校で学んだ語彙を復習しつつ、つづりに意識を向けさせられるとよい。



また、Starter 5に文字で示している単語だけで、英語の基本的な子音（/ʒ/以外の子音）、母音（単母音、二重母音など）をカバーしているので、生徒が単語をどのように発音するのかをよく聞き、基本的な音声の定着状況を把握するとよい。その際、巻末資料のSounds「つづりと発音」も活用できる。また、英語の音については、各Lessonの脚注にも発音のポイントを示しているため、本課に入ってからも継続的に指導していきたい。

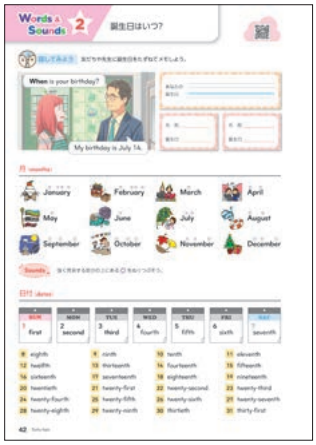
Starter 6

Starter 6では、単語や文の書き方を確認する。左ページでは、大文字と小文字を書く活動を設定しているが、機械的な練習活動とならないように、キャラクターの自己紹介を聞いて、出身地の国名コードと好きな動物を書かせる。右ページは、Starter 1〜4で話した話題について、なぞり書きをしたり、単語を書き写したりしながら文を書く。小学校では、4線上に大文字と小文字を書くことができるように指導しているが、実際に習得するまでに時間がかかるため、個人差も大きい。このページを活用するときは、ペンマンシップとあわせて、目の前の生徒がどの程度文字を書くことを身につけているかを見取るとよい。

Words & Sounds

Lesson 1 , 2のあとに、Words & Soundsというページが2つ設定されている。小学校で、数を尋ねたり、誕生日を伝え合ったりする活動を経験してくるが、How many ...?やWhen is ...?といった表現を、ここで改めて「数」「月名」「日付」といった語句と一緒にふり返る。特に「数」については、カタカナで馴染みのあるものも多いため、日本語と英語の音声の違いに留意しながら確認したい。

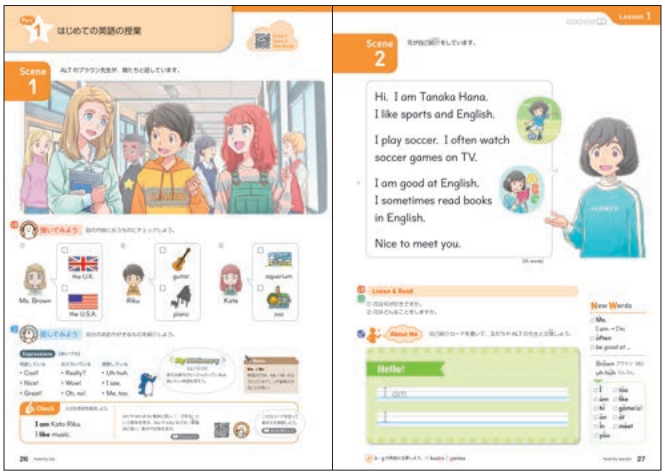
なお、小学校では、自分の誕生日を話す機会はあるが、ほかの日付を言えるようになっているかは個人差がある。つづりとあわせて、このページで確認できるとよい。また、買い物の場面などで“I want tomatoes, please.”と言われたあとに“How many?”と尋ねるような活動を行っているが、How manyに続く名詞を複数形にすることや、後ろに疑問文を続けるときの文の形は身についていないかもしれない。ここで改めて指導できるとよい。



Lesson 1〜4：中学校の学びにスムーズにつなぐ

とびら

Part 1〜3



Goal Activity

*07NC*では、Lesson 1以降は本課にあたるが、ここでも小学校での学びをふり返りながら、中学校の学びにスムーズにつなぐための配慮が、構成や指導手順などさまざまなところに表れている。

小学校の学びを整理しながら、基本文を導入する

小学校ではさまざまな表現にふれているが、それを明示的に学ぶわけではない。Partの左ページでは、そんな小学校でふれてきた表現を整理し、中学校の学びにつなぐ。

「聞いてみよう」では、基本文が使われている音声を3つ聞いて、内容にあてはまるイラストを選択する。例えば、Lesson 1 Part 1の基本文は、be動詞と一般動詞の肯定文である。どちらも小学校でたくさん使ってきているが、それぞれの形や意味、機能の違いを明示的に学んでいるわけではない。中学校ではこれを整理し、区別して使えるようになる必要がある。ここの「聞いてみよう」では、小学校で慣れ親しんだ表現がふんだんに使われた自己紹介を聞くが、3つの音声のうち、①はbe動詞だけを、②は一般動詞だけを、③は両方を使ったスクリプトになっており、be動詞と一般動詞が自然に使われている文脈から、それぞれの共通点や違いに着目させやすくしている。

Lesson 1 Part 1 Scene 1「聞いてみよう」スクリプト

① *Ms. Brown:* Hi. I am Lucy Brown. I am your English teacher. I am from the U.K. Nice to meet you.
Riku: Nice to meet you, too.

② *Riku:* I am Kato Riku. Call me Riku. I like music. I play the guitar. I practice it every day.
Ms. Brown: Oh, you are a guitarist? Cool!

③ *Kate:* I am Katherine Jones. Call me Kate. I am from Australia. I like animals. I often go to the zoo.
Ms. Brown: Nice! I like animals, too.

「話してみよう」では、基本文を導入する前に、それを使うようなトークテーマで生徒たちにやり取りさせる。そのときの生徒の発話を整理してから基本文の導入につなぐこともできる。

音声で慣れ親しんだ表現を「読む」ことから始める

小学校では、音声で十分に慣れ親しんだ語句・表現を読むことは経験しているが、初見の英文を読むということはほとんどない。そのため、接続期の間は、「聞いてみよう」の音声と類似した表現で書かれた英文を読むことから始める。

Lesson 1 Part 1の「聞いてみよう」では先述の通り、3人のキャラクターが自己紹介をしているが、右ページのScene 2では、4人めのキャラクターの自己紹介を読む。I like ....などのあとに続く個々の単語は異なるが、文の流れや多くの表現はスクリプトの英語と重なる。英文を読むことに抵抗がある生徒に対しては、「聞いてみよう」の流れで本文の音声をたくさん聞かせてから、読む活動に移行することも考えられるだろう。

小学校で経験した言語活動を、中学校の学びを経てもう一度

Lesson末には、Goal Activityが設定されている。接続期のLesson 1〜4では、「自己紹介」「人物紹介」など小学校で経験している活動に類似したものを配置している。これは、中学校の学びを経て、表現力などが向上していることを生徒たちが実感できるようにするためである。

小学校の多くの教科書がそうであるように、*07NC*も単元全体がGoal Activityに向けて構成されている。「とびら」では、Sceneの音声を聞いて場面やトピックを導入したあとに、Small Talkを行う。このSmall Talkには、Goal Activityと同じトークテーマが設定されており、まずは既習の語句・表現を使いながらやり取りする。ここでのパフォーマンスをふまえて、Goal Activityに向けて何ができるようになりたいか、どんなことを伝えられるようになりたいかを生徒に考えさせ、目的意識を持って学ぶように促す。また、各Partの最後にAbout Meという活動があるが、そこでは基本文を使って自分のことについて1文を書く。Lessonによっては、ここで書き溜めたことがGoal Activityに活用できる。

レッスン構成

言語活動を中核に据えて無理なく力をつける教科書

津久井 貴之
（群馬大学）

新しいNEW CROWNが目指しているもの ―3つの特長

新しいNEW CROWNの改訂の意図を端的に言えば、「言語活動を中核に据えた授業づくりを力強く支えるための改訂」だと考えている。筆者自身の中学校・高校での指導経験も踏まえて言えば、教科書の題材と紙面構成は、授業づくりに大きな影響を与える重要な要素である。教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教えるからこそ、教科書のレッスン構成やその意図は今まで以上に大切な役割を担う。今回の改訂は、まさにこうした理解を前提に、生徒たちのために更なる授業改善や指導の工夫を求める先生方を後押しするものであると自負している。

単元のゴールの達成に向けて、さまざまな言語活動や学習を一連の学びとしてつなげることを意識して改訂したレッスン構成を、2年Lesson 5 “Visiting Australia”を例に紹介する。これまでのNEW CROWNのよさを生かしつつ、「単元としてのまとまり」を更に意識したレッスン構成の特長は、以下の3点である。

特長1 「目的や場面、状況」を意識したScene（場面設定）の一貫性 ：「とびら」からゴールの言語活動まで

《ここがポイント!》

① とびらでは、Lesson Previewとして、後に続くPartや単元のゴールとなるGoal Activityの内容を確認でき、学習の見通しを立てることができる。

② 単元のゴールとなるGoal Activityに向けて、1つのレッスンは1～3のPartで構成されている。各Partには目的や場面、状況を意識したSceneが置かれている。

③ Part 3 Side Storyでは、PartのSceneの裏話や補足情報、あるいは補完的なエピソードを取り上げている。

本書pp.8-9では、2年Lesson 5の紙面とともに各Sceneのリード文や活動のトピックを抜粋して提示した。Sceneは単元の学習のゴールとなる言語活動（Goal Activity）に向けた一連のストーリーになっており、それぞれ目的や場面、状況などが明示されているのがわかるだろう。

とびらでは、レッスンの題材内容を想像させるさまざまな写真や発問とともに、Goal Activityの内容が明示され、目標を確認することができる。生徒はどのような学習を行うのかを想像しつつ、ゴールまでの見通しを持って学習を進めることができるだろう。

先日、ある中学校の先生が、授業でおすすめの旅行先を紹介する活動の際に生徒から「先生、これって誰に紹介しているんですか。」と質問されたそうだ。英語を使ってコミュニケーションを行う際、目的や場面、状況がないことに違和感を持つのはむしろ自然なことである。新しいNEW CROWNのまとまりのある単元構成の中で、Sceneの目的や場面、状況などを踏まえた言語活動を行えば、生徒は疑問や違和感を持つことなくスムーズに取り組むことができるだろう。

特長2 2つの「流れ」を意識した紙面構成 ： 指導の流れと、自然な言語学習の流れ

《ここがポイント!》

① Lessonの中心となるPartは、Small Talkのやり取りの活動から始まる。

② Scene 1では聞く活動を行い、無理なく十分にインプット（聞く）をExerciseにつなげることができる。

③ Scene 1から続くScene 2の本文は、Goal Activityで取り組む活動のモデルの一部にもなっている。

④ Think about Yourself（話すこと［発表］・［やり取り］）で自己表現の機会を確保している。

Partは、左ページ下のような見開きの紙面構成で、指導や活動の手順が先生にも生徒にもわかりやすくなっている。例えば、Part 1の1時間目の指導手順をリストにすると以下のようになるだろう。想像される発問とともに概観する。

① Small Talk ペアでのやり取り
Now, I will show you some pictures. Which country do I want to go to? Can you guess?
Which country do you want to go to in winter? Let's talk in pairs.

② Scene 1 聞く活動
Look at this Scene 1. Riku is talking with Kate. What are they talking about? Can you guess? A hint? OK. Where is Kate from? Now please listen to Riku and Kate. What are they talking about?
※この後、巻末資料のScene 1のスクリプトを見せることもできるだろう。

③ Check 新出言語材料〈show+A+B〉の導入・説明
I showed you some pictures of the U.K. And in the dialogue, Kate showed Riku some pictures of ... which country? Yes, Australia. Kate showed Riku some pictures of Australia.
どんな意味かな?（スライドなどに英文を示す）ケイトが陸との会話で言っていたセリフです。I will show you some pictures.（ジェスチャーなどで英文の意味を示しながら）

④ Exercise 新出言語材料の練習
OK, now let's listen to the dialogue between Hana and Mark this time.（音声を聞く）
Good. Do you know Hana's birthday? Her birthday is February 22. I will give her a towel. I think she needs towels because she plays soccer. How about the other characters? What will you give them for their birthday present? Talk in pairs.
Now, please choose one character, and write a sentence. I will give ... because ....

このように、1ページの紙面が1時間の指導の流れに沿って配置されている。もちろん生徒の実態や興味・関心などに応じてさまざまな展開が考えられるが、紙面を追えば基本的な活動ができるようになっている。活動の手順を先生と生徒で容易に共有することができ、活動の内容や使用する英語に集中して取り組むことができるだろう。

各Partに置かれたScene 1では、新出言語材料が自然な場面で使われている会話や発表を聞く活動を行う。アニメーションや写真などを活用することで、新出言語材料の使用場面や働きについて気づかせたり、大まかに文脈をつかませたりするのに適している。

Scene 1から続くScene 2の本文は、文字で示されている。本文の場面や文脈を手がかりに、「聞くこと」に加えて「読むこと」でも、新出言語材料の意味や使われている場面、働きなどについて理解を深めていく。Scene 1と2を併せた内容理解の発問も行いながら、生徒は英文を何度も聞いたり、読んだりすることで、十分なインプットを得ることができるだろう。

さらに、十分なインプットの後にはThink about Yourselfという自己表現活動が設定されている。自然な言語学習の流れに沿いつつ、生徒の実態に合わせて先生が活動の扱い方を柔軟に変えられるようなシンプルなタスクになっている。Lesson 5 Part 1 Scene 2の「海外から日本に来た旅行者に紹介したい場所はどこですか。」という問いであれば、「（Goal Activityを意識した活動として）旅行者に伝えるつもりで考えてみよう。」などと指示をして、"I will show you Shima Hot Spring. It's my favorite hot spring."と話したり、書いたりする活動ができるだろう。

Partの終わりに先生が運用しやすいシンプルな自己表現活動を設定することで予想される効果は次の3点である。

❶アウトプットを通して、再度インプットへの意識が高まる。

あっ、そうか。こんなときに教科書のこの表現が使えるのか。

うまく書けないな…。本文にある表現が使えるかなあ。読み直してみよう!

❷目的や場面、状況などへの意識付けにつながる。

海外からの旅行者に紹介したい場所?
日本に来る季節によって、紹介したい場所が変わるかなあ。

❸身近な生活とのつながりを考えるようになる。

身近にある建物や場所の愛称…?「四万ブルー」がそうだ!
え〜と、You can see ... many kinds of blue colors ... of the ... lakes in Shima .... We call it ... Shima Blue!

「特長1」で触れたが、「まとまりのある単元構成」はScene 2の本文にも強く反映されている。十分なインプットによって生徒に少しずつインテイクされた英文は、Goal Activityの「複数の詳しい情報を付け加えて、町で訪れてほしい場所や体験してほしいイベントを、旅行者に紹介しよう」という活動でも使用できるように工夫されている。ここで、単元のゴールで予想される生徒のパフォーマンス例（下図）を見てみよう。下線部は本文の表現の一部を活用したものである。

Hello, I'm Takayuki. I will tell you my favorite spot in Gunma.
What's this?（写真を提示）It looks beautiful, doesn't it? My favorite spot is Shima Onsen, Shima Hot Spring. It takes three hours to go to Shima Onsen by train and bus, but I think it is the best onsen to enjoy hot spring therapy. Also, you can enjoy eating delicious eggs. We call them Onsen Tamago. I love them.
Come to Shima and enjoy the onsen culture!

特長3 言語活動を中核に据えた授業運営を無理なく行うための単元のゴール

《ここがポイント!》
LessonはWrite / Speak（書くこと・話すことの発信領域）の言語活動がゴールの場合と、Read（読むことの受容領域）の言語活動がゴールの場合の2種類に分けている。

限られた授業時間の中でもしっかりと言語活動を行ってもらうため、生徒の興味・関心や、単元の題材及び教科書本文のジャンルと言語活動の相性を考慮し、全国各地の先生方のご意見を踏まえて構成を改変した。単元のゴールの言語活動を明確にすることで、言語活動を中核に据えた授業運営を無理なく、しかし着実に行うことができる。

ここまで紹介してきた2年Lesson 5は「話すこと［発表］」領域の言語活動が単元のゴール（Goal Activity）として設定された例である。もちろん、同じ発信領域の「書くこと」の言語活動がゴールとなっている単元も、3学年を通してバランスよく設定されている。例えば、1年Lesson 6の「書くこと」のGoal Activityでは、日本の学校生活を知りたいというケビンからのメールに返信する（本書pp.10-11, 26-27を参照）。SETTINGでは英文を書く目的や場面、状況を確認し、返信する目的を明確にすることができる。Readのタスクでは、モデル文を読み、書かれた内容を表などに整理することで、メールの形式や段落の構成を分析することができる。更に、二次元コードから、ケビンがモデルの英文を書く際の過程が視聴できるため、ライティングのプロセスも学ぶことができる。

次に、「読むこと」の領域の言語活動がゴールの2年Lesson 3を見てみよう（本書pp.15, 28-29を参照）。このGoal Activityでは、記事の概要をとらえることをGoalのタスクとして設定し、「読むこと」の言語活動をしっかりと行う。この場合の「概要」とは、記事の大まかな内容であり、この読み取りができなければそれに応じること（質問すること）も難しくなってしまう。Guideのタスクを段階的な支援として用いながら、「記事の概要のとらえ方」をしっかりと学習できるようになっている。

また、ポストリーディング活動として「考えや意見を伝えよう。」という言語活動を設け、指示文とともに表現例が掲載されている。Read（読むこと）がゴールのLessonには、読んだことを踏まえて書く活動など、取り組みやすい言語活動を設定している。先生方の工夫や判断でアウトプットの言語活動として発展させたり、家庭学習として取り組ませることもできる。

ここまで、改訂のポイントに焦点を当てて説明をしてきたが、最後に新しい*NEW CROWN*が「変わらず大切にしているポイント」にも触れておきたい。それは題材の深さとこだわりである。このアイデンティティは失うことなく、新しい*NEW CROWN*の新しいレッスン構成が、生徒の資質・能力を高めるために、多くの先生方の日々の地道な授業改善を後押しする存在となることを強く願っている。

レッスン構成（2年 Lesson 5 “Visiting Australia”）

とびら
単元のゴール（Goal Activity）の提示（話す［発表］）
複数の詳しい情報を付け加えて、町で訪れてほしい場所や体験してほしいイベントを、海外からの旅行者に紹介しよう。

Part 3 Side Story
ダイアローグ（聞く・読む）
ツアーガイドのベティーと芸術家のバランガさんが話しています。

Small Talk 旅行に行ってみたい国について、ペアで話してみよう。

Small Talk 旅行先でしてみたいことについて、ペアで話してみよう。

Think about Yourself 海外から日本に来た旅行者に紹介したい場所はどこですか。

Think about Yourself 身近にある建物や場所には、どんな愛称がついていますか。

Part 1

Scene 1［ダイアローグ(聞く)］
陸が、オーストラリアから帰ってきたケイトと話しています。

Scene 2［ダイアローグ(聞く・読む)］
ケイトが撮った写真を見ながら、陸が質問しています。

Part 2

Scene 1［ダイアローグ(聞く)］
陸は、ケイトのおばさんが運営しているオンラインツアーに参加しています。

Scene 2［モノローグ(聞く・読む)］
ツアーガイドのベティーが、ウルルについて説明しています。

Today's Topic
Where is a good place to visit in our town?
町でおすすめの場所は？

Small Talk Plus

(話す[やり取り])
町でおすすめの場所や旅行に行ってみたい国、旅行先でしてみたいことについて、ペアで話そう。

Goal Activity

SETTING
ツアーガイドのベティーと一緒に、旅行者に町や地域の魅力を伝える動画を作ることになりました。

書くこと・話すこと［発表］

Goal Activityに向けたつながりのある指導

工藤 洋路
（玉川大学）

Goal Activity Read ⊕ Write / Speak とは?

新しい*NEW CROWN*では、各レッスンの最後にGoal Activityという名の言語活動が設定されている。Goal Activityには、活動のメインが発信領域（書くこと／話すこと）のものと、受容領域（読むこと）のものがある。本稿では発信領域の言語活動（「Write / Speak」）を取り上げ、その特徴や指導のポイントなどについて概説する。

「Write / Speak」は右の表の通り、各学年において、複数の単元に設定されており、主たる活動がWrite「書くこと」の単元とSpeak「話すこと」の単元に分かれている。なお、学習指導要領で示されている「話すこと［やり取り］」については、教科書では主にSmall Talk Plus（本書pp.13, 24-25）とTake Action! Talk（本書pp.13, 34-35）で扱っているため、詳しい説明はそちらに譲る。

「Write / Speak」のページは、2・3年生のLesson 1を除いて、すべて見開きの2ページで構成されている。多くの単元では、左ページにモデル文（Speakであれば発表メモ）が載っている。このモデルは、教科書の登場人物が作成したという設定になっており、同ページの二次元コードから、その人物がモデル文を作った過程をアニメーションで視聴できる。これを見ることで、ある程度まとまった量の英文を書く際にたどるべきプロセスを学ぶことが可能になる。右ページでは、このモデルを分析した上で、設定されたステップに従って、実際に書いたり、話したりする活動になっている。

「Write / Speak」では、どの単元の活動においても、英語によるコミュニケーションを行う上での目的・場面・状況が設定されている。生徒と一緒に、誰に向けて、何のために伝えるかということを確認した上で、書くことや、話すことの言語活動に取り組ませたい。

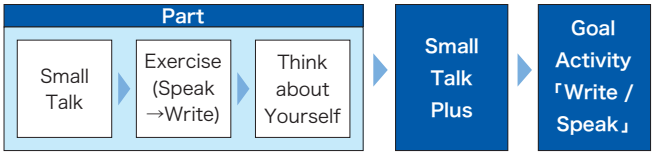
	発信領域		受容領域
	Write（書くこと）	Speak（話すこと）	Read（読むこと）
1年生	Lesson 6, 8	Lesson 5	Lesson 7, 9
2年生	Lesson 2, 4, 7	Lesson 1, 5	Lesson 3, 6, 8
3年生	Lesson 2, 4, 5	Lesson 1, 7	Lesson 3, 6, 8

（※1年生のLesson 1 ～ 4は「書いてから話す」という言語活動）

Read ⊕ Write / Speak につながる小さな言語活動

ある程度まとまった内容を書いたり、話したりする言語活動は、一般的に単元の最後に位置づけられることが多い。「Write / Speak」も各単元の最終活動として設定されている。その理由の1つは、各単元にはターゲットとなる文法事項があり、「Write / Speak」でこの文法事項を活用することを想定しているからである。そのため、授業展開は、まずは新しい文法事項を学習した上で、次に、その文法事項を定着させるための練習活動を行い、そして最後に、それを活用する活動を行うことになる。つまり、単元の指導は、PPP（Presentation - Practice - Production）型の授業展開になる。Presentationの段階で文法を導入し、Practiceの段階でその文法を練習し、そして、最後のProductionの段階でその文法を活用するための言語活動を実施するという展開である。

しかし、PPPには、PresentationやPracticeで時間をかけ過ぎるとProductionの時間が取れなくなることに加えて、文法の定着なしでは言語活動に進んではいけないという感覚を、教師も生徒も持つ可能性があるというデメリットがある。加えて、厳密にPPPに従い各段階を分離して個別に行うと、学習指導要領がうたう「言語材料と言語活動とを効果的に関連付け（る）」ことができない。そこで、新しい*NEW CROWN*では、単元の最後の「Write / Speak」だけで言語活動を行うのではなく、その最後の活動に向けて、小さな言語活動を積み上げていけるように、単元の前半のPartには、Small Talk、Exercise (Speak→Write)、Think about Yourselfといった活動が組み込まれている。これらの活動は、発信する英語の量はそれほど多くはないが、自分の考えや経験などを伝える活動になっている。また、Goal Activityが「Write / Speak」の単元には、その直前にSmall Talk Plusという「話すこと［やり取り］」の活動が設定されている。こうした活動を積み上げていくことで、「Write / Speak」で必要な言語材料や言語技術などを少しずつ学習することが可能になる。



1年 Lesson 6 Part 1

1年 Lesson 6 Goal Activity

Read ⊕ Write / Speak を見据えた単元指導のポイント

先に述べた通り、各単元では「Write / Speak」に向けて複数の言語活動を積み上げていくことができる。その際、右の表の通り、Partの各活動では、「Write / Speak」に取り組む際に必要となる要素を学習のポイントとしたい。

㊀1年 Lesson 6を見てみる。まず、学習ポイントの1つはトピックである。Goal Activityに向かう過程において、共通のトピックを扱うことで、事前に簡単なブレーンストーミングを行っている状態を作ることができる。言語材料については、ここの「Write / Speak」では写真を添えて返信メールを書くことが求められているため、その描写に必要な現在進行形を、同じ写真描写の活動で事前に学習する。設定は、ここでは「海外の人に伝える」であるため、日本の学校のことに詳しくない人に伝えるときの留意点を事前に学ぶ。構成や展開では、「日常（一般）の描写：給食で全員が同じものを食べることの説明」→「具体描写：給食でカレーを食べている写真の描写」といったように伝える内容の展開を事前に学ぶ。言語技術は、ここでは「感想を伝える」を扱っている。Goal Activityで書く返信メールは事実描写だけではなく、自分の感想を最後に加えることで、より適切なメールになることから、事前にこの技術を学ぶ。このように、Goal Activityで必要な要素を事前に1つずつ学び、最後にそれらを組み合わせながら、与えられた課題に取り組むことで、実際の言語使用に近い形態のコミュニケーションを体験できることになる。

㊀1年 Lesson 6　School Life in the U.S.A.

パート		活動内容	学習ポイント
Part ❶	Small Talk	好きな教科について、ペアで話してみよう。	・トピック
	Exercise	絵を見て、それぞれの人物が何をしているか説明しよう。	・言語材料
	Think about Yourself	海外の人に話すつもりで、休み時間や昼休みにしていることについて、写真を見せながら説明しよう。	・設定 ・トピック ・構成や展開
Part ❷	Small Talk	好きな給食やお弁当について、ペアで話してみよう。	・トピック
	Exercise	絵を1つ選んで、ペアでクイズを出し合おう。	・言語材料
	Think about Yourself	海外の人に話すつもりで、学校の昼食について、写真を見せながら説明しよう。	・設定 ・トピック ・構成や展開
Small Talk Plus		What do you like about your school life?	・トピック ・言語技術
Goal Activity「Write」		アメリカに住んでいるケビンからアメリカの学校生活を紹介するメールが届きました。日本の学校生活や行事を紹介する返信メールを書いて、花たちと一緒に送ろう。（写真を添えて）	

Read ⊕ Write / Speak ではプロセスも重視する

「Write / Speak」では、書いたり、話したりする前に、モデルの英文を読んでそれを分析するReadという活動が設定されている。モデル文を読んで、キーワード等を表に埋めることで、内容の理解に加えて、作成すべき文章の構成や展開を把握することができる。一方で、実際に文章を作成するときは、瞬時にまとまりのある文章が完成するわけではない。思いついたアイデアを整理して、下ごしらえをした後で、1つずつ英文の形にしていく。このプロセスの学習が英語でまとまりのある文章を作成するために大切になる。そこで、「Write / Speak」では、「Watch 陸が書いている様子を見よう」といった動画が用意されている。英文の書き手が、アイデアをどのように創出し、それらをどのように取捨選択して、アウトラインを作ったかなど、二次元コードを活用することで「書くプロセス」の学習が可能となる。また、話すこと［発表］の活動についても、いくら内容が素晴らしいものであっても、話す際の工夫がなければ相手に適切に伝わらない。二次元コードを活用すれば、「Watch アンが話している様子を見よう」といった発表のモデルとなる動画を生徒に視聴させることができるので、併せて聞き手に伝わるように話すことの大切さを指導したい。

話すこと[やり取り]

「やり取り」ができる主体的・協働的な学習者を育てる

今井 裕之
(関西大学)

*NEW CROWN*における「やり取り」の指導のアプローチ

新しい*NEW CROWN*では、即興的なやり取りの指導を、Small Talk → Small Talk Plus → Take Action! Talkの3セクションでの言語活動を通して行う。相手と互いの気持ちや意見を交わしながら、多様な目的・場面・状況での言語活動の課題を、協働して乗り切る体験を重ねて即興的に話す力を育成する。

Small Talkは、各レッスンのPart 1〜2の最初に配置され、小学校との接続を想定し、身近な話題について話すことから授業を始めることができる設計になっている。Small Talk Plusは、レッスン中間、Goal Activityの前に配置され、会話を継続するためのストラテジーやスキルを学ぶ。そしてTake Action! Talkは、やり取りの中でも高度な言語活動を系統的に指導するため、レッスンから独立して配置している。現行の*NEW CROWN*と比較して、「やり取り」の指導を、より頻繁かつ継続的に行う設計になっている点が特徴である。また、言語活動をくり返す途中に「中間指導」を行うポイントを明示しているところも特徴的だろう。活動をただくり返すのではなく、中間指導で「気づき」を促し、学びを深める「Do, Learn, and Do Again方式」を取り入れている。

Small Talk:「まずやってみる」ことに意義がある

レッスンの各Partは、Small Talkから始まる。各Partのテーマやトピックに関する身近で導入的な話題について、学習前の時点の自分の力で「まず、何がどこまでできるかやってみる」という現状把握を意図した活動である。

「習う前にできるはずがない」「間違った発話をさせるだけ」「生徒たちがやる気や自信をなくす」といった指導者心理が働くかもしれない。しかし、Small Talkでは、そのPartで学習する言語材料等を使う必要はなく、既習の語句や表現で「友だちに言いたいことがまだうまく言えない」ことを実感し、言語面、内容面で自分が知りたいこと、できるようになりたいこと（主体的な学習目標）を自覚させ、「できるようになりたい!」という実感を伴った目標を設定させることを意図している。また、「生徒たちが自信をなくす」という不安については、先生が“Don't be afraid. Mistakes are OK.”と励まして解決しようとするのではなく、パートナーとの「二人称的関係」で解消させたい。二人称的関係とは、聴衆の一人として発表者の話をただ聞く「三人称的関係」とは異なり、常に相手に反応する「応答責任」と、相手に負の感情を抱かないよう「感情調整する責任」を互いが果たす関係性である。生徒たちが相手との二人称的関係を大事にしようとする心理に任せてみることは、主体的な学びのスタート地点でもある。

ただ、すべてを生徒任せにするわけではない。各Partの終わり（ページ右下）に配置したThink about Yourselfは、Small Talkの話題に関連する内容についてやり取りを行い、各Partの学習を通して、できるようになったことを確認する。例えば2年Lesson 5 Part 1であれば、Small Talkでまず、「旅行に行ってみたい国について」ペアで話し、Part 1の終了時のThink about Yourselfでは、「海外から日本に来た旅行者に紹介したい場所」について相手に説明する（この話題は単元末のGoal Activityにもつながる）ことで、自分の表現力の変化を把握する。もちろんこの時点では劇的に成長してはいないが、Small Talkの時は気づかなかった課題に気づくことができれば、十分に目的は達成したといえる。この際、お互いのパフォーマンスにコメントし合うことが、自分の課題を発見することにつながるのも、「二人称的関係」での学習活動のメリットである。お互いが相手の学びや成長をサポートし合う関係性を築くことが「主体的に学習に取り組む態度」の指導につながる。自律する過程において、相互依存することの大切さを生徒たちが理解できれば、学習共同体としての教室の質が高まる。

2年 Lesson 5 Part 1

Small Talk Plus：会話を継続するためのストラテジーの指導

チャットやスモールトークを継続的に行っている指導者から、「言語材料は定着するのか」「どんな技能を指導しているのか全体像が見通しにくい」という声を聞くことがある。

Small Talk Plusは、レッスンの中間地点に配置されており、各レッスンのテーマや言語材料を踏まえて、「レッスン内の流れ（＝横のつながり）」をしっかりと確保しつつ、レッスンごとに、会話を継続させるためのストラテジーやスキルの学習に焦点を当て、「レッスン間の系統性（＝縦のつながり）」を持たせることで、会話を継続させるためのストラテジーやスキルを体系的に学ぶセクションである。ストラテジーやスキルの例として、「相手の発話に共感しながら応答する」「情報をつけ加えながら説明する」など、会話を継続するために、「聞き手」「話し手」それぞれの役割に合った工夫の仕方を学ぶ仕組みになっている。

Small Talk Plusでは、1時間の授業の中で、話す機会を3ラウンドに分けて設計している。Round 1では、トピックについて話しながら中間指導を入れて、Tips!（＝そのレッスンで学ぶストラテジーやスキル）を活動しながら確認する形で学ぶ。Round 2では、同じ話題について、ペアを変えてよりたくさんの人と話す。ペアが変わることで、自分の発言内容・表現や話の展開が変わり、ストラテジーやスキルを意識的に使おうとする。その際、指導者は中間指導の機会をとり、生徒たちに自分のパフォーマンスをモニターさせる。そうさせることが自己調整能力の育成につながる。Round 3では、話題を変える。話題を変えると言っても、全く新しい話題ではなく、すでに話したことがあるPart 1〜2のSmall Talkのテーマを用いることで、自信を持って話す活動に臨むことができるし、前の授業の時の自分のパフォーマンスと比較して、自分の成長を実感することもできる。このように、“Do, Learn, and Do Again”とスパイラルに取り組むことで、自分たちの経験の蓄積を学びや成長として実感しやすいように*NEW CROWN*は設計されている。第二言語習得にくり返しは不可欠だが、「何をくり返すのか」「どのようにくり返すのか」ということについて、私たち教師は、共通した認識を持つべきであろう。文法定着・語彙記憶のためのくり返しだけがくり返しではない。会話を継続するためのTips!を、相手や話題を変えながらくり返し活用することも、重要なくり返しである。

2年 Lesson 5 Small Talk Plus

Take Action! Talk：リアルな場面設定、高度な話題や課題

*NEW CROWN*では、これまで「やり取り」をCEFR等の考え方を取り入れて3つのカテゴリで捉えてきた。

①相手と気持ちなどを伝え合い、良好な関係づくりを目的とするChat
②買い物など明確な目的のために情報の交換を行うTransaction
③問題解決を図ることを共通目的とするDiscussion

新しい*NEW CROWN*もその枠組みに変更はない。Small TalkとSmall Talk Plusは、主にChatの習熟に焦点を当てているのに対し、Take Action! Talkは、共通のゴールが明確なTransactionタイプと、問題解決を図るDiscussionタイプのやり取りに焦点を当てている。

Transactionタイプのやり取りの特徴は、場面や状況が明確で具体的であり、目的達成には参加者の協力が必要で、各々が果たすべき役割が明確な点にある。例えば、右のTake Action! Talkのような「電車の乗り換え案内」の場合は特に、場面や状況の設定なしには成立しない。また、「目的地にたどり着く方法を尋ねる・教える」を達成するためには、双方が表裏の役割を演じ、果たすことが必要である。これらの必要条件を総合すると、Take Action! TalkのTransactionの指導には「ロールプレイ」が最適であり、目的達成のための役割を演じること（perform）こそが、Take Action! Talkの学び方のポイントである。

問題解決を目的とするDiscussionタイプの場合、問題解決による合意形成のために、参加者の協力が必要である点では、Transactionと似ている。また、このタイプでも、場面・状況にあたる、議論の前提条件等の設定が活動の成否を決めるため、ロールプレイを採用している。

Take Action! Talkは各学年に4回設定されている。年間指導計画が見通しにくいかもしれないが、Transactionタイプのやり取りが行われる特定の場面と、「言語の働き」を組み合わせ、3学年でバランスよく学習できるよう配置している。また、Discussionについては、より高度なやり取りの能力が必要であるため、主に2・3年の2年間を通して、徐々にDiscussionに必要な下位技能を積み上げられる配置にしている。

2年 Take Action! Talk 3

やり取りの指導は、小学校の学びが確実に生かせる領域である。*NEW CROWN*では、Small Talk, Small Talk Plus, Take Action! Talkで、やり取りの3つのカテゴリをまんべんなく体系的にカバーした。中間指導で生徒の自己調整力を伸ばしながら、「Do, Learn, and Do Again方式」の指導で、小中英語教育の連携がますます強まることを願う。

聞くこと・読むこと

インプット（理解）を確実にするための設計と工夫

臼倉 美里
（東京学芸大学）

「聞くこと」：より「リアル」な言語使用の機会を求めて

学習指導要領では、授業中に生徒に英語を使わせる際には、実際に英語を使うことが想定される目的や場面、状況などを設定することが求められている。生徒に英文を聞かせる際には、あなたは今どこにいて、何のために英文を聞くのか、英文を聞いて何をするのか、といった情報を与えた上で、本物に近い疑似体験をさせることが望まれる。新しい*NEW CROWN*では、より「リアル」な言語使用の機会を生徒に与えることを目指して改訂を行ったが、Take Action! Listenもこの点において例外ではない。学習指導要領の「聞くこと」の目標に含まれる「必要な情報を聞き取る」「概要を捉える」「要点を捉える」という3点それぞれに対応した活動が3学年を通して用意されており、生徒は難易度が徐々に上がっていく活動に取り組みながら聞く力を伸ばすことができる。

紙面に沿ってTake Action! Listenの特徴を見てみよう。3年Take Action! Listen 2では、カナダの高校に留学中の夏海が、ホストブラザーのマットと遊園地に遊びに来ているという設定である。混雑している園内で楽しい時間を過ごすために、園内アナウンスから有益な情報を得ようとしているという状況で、人気アトラクションの待ち時間や、一時的なアトラクションの閉鎖、特別なショーについての情報の要点を聞き取らせる。この場面や状況の設定は、多くの生徒が「遊園地」と聞いて思い描くであろうことに沿う内容になっている。

3年 Take Action! Listen 2

1st Listening ～ 3rd Listening の指導

Take Action! Listenでは、3つのステップを踏んで生徒にくり返し英語を聞かせることで、「聞いて理解できた内容が少しずつ増えていく」という成功体験を積ませ、英語を聞くことへの抵抗感を下げることを目指している。1st Listeningでは、音声を聞きながらアナウンスの要点をメモにまとめ、聞き取った情報を整理していく。2nd Listeningでは、1st Listeningで聞き逃した情報を補完する目的で再び英文を聞く。3rd Listeningでは、巻末資料のスクリプトを見ながら音声を聞く。これは「聞きっぱなし」にしないための工夫である。聞く力を伸ばすためには、単に英語をたくさん聞けばよいわけではなく、聞いた内容を文字で読んだり、聞いた内容に関することを話したりするといった技能間の往還（技能統合）が不可欠である。また、スクリプトを使って音読練習した後に、再び文字を見ないで音声を聞かせることで、英語の定着はもちろんのこと、英語が苦手な生徒に「英語が聞こえるようになった！」という体験をさせ、自信をつけさせることにもつながる。

Think の指導

3つのListeningが終わった後に設けられているThinkでは、聞き取った内容について自分の感想や意見などを英語で発信する活動を行う。「自分が夏海だったら」という想定のもと、聞いた内容をもとにどのような判断をするか、そしてそれはなぜかを考えさせ、英語で表現させることを目指している。この活動を最後に設けることで、それより前のListeningの活動を生徒に「自分ごと」としてリアルに捉えさせ、集中して取り組ませることをねらっている。

BONUS の指導

さらにBONUSでは、3つのListeningでくり返し触れた英文とパラレルな音声を聞いて、必要な情報や概要・要点などを聞き取るタスクに取り組むことで、そこまでの学びの成果を試すことができる。指導書にはパラレルな活動がさらに用意されているので、そちらも活用していただきたい。

最後に、生徒の学びをサポートする一工夫について紹介する。Take Action! Listenには「ペンギン」と「シロクマ」のキャラクターが登場する。ペンギンは、英語を聞くときにどのような点に注意して取り組んだらよいかなど、活動に取り組む際のTipsを教えてくれるのに対し、シロクマは、聞き取る情報の順番や内容の特徴などについて、生徒と同じ目線に立って気づきを促すつぶやきをしてくれる。英語を聞いているとき、生徒は一人で英語と向き合わなければならない。ペンギンとシロクマは、生徒があきらめずに最後まで英語を聞くことができるように、紙面上で生徒を支え、応援する役割を担っている。

「読むこと」をあきらめさせないレッスン構成

さらに使いやすい教科書を目指して

新しい*NEW CROWN*ではレッスン構成が一新され、レッスンの最後に置かれているGoal Activityに向かって各Partの学びを積み重ねていくという構成へと生まれ変わった。これにより、「読むこと」の指導がさらに行いやすくなった。また、学習指導要領で定められている「読むこと」の目標のうち、「必要な情報を読み取る」ことはTake Action! Readで扱い、「概要や要点を捉える」ことはGoal ActivityやReading Lessonで扱うことで、教科書の各場面で明確な目標を持って「読むこと」の指導を行うことができるようになった。以下、Goal Activity [Read]の3つの特徴について詳しく紹介する。

無理のない連携を目指した新しいレッスン構成

Goal Activity [Read]で、説明文・意見文・物語文の概要や要点を読み取る活動を行うことを見据え、各Partでは同じテーマに基づいた短めの英文を読み、関連する語彙や表現に触れて準備を行う。例えば2年Lesson 3では、Part 1（64語）とPart 2（72語）で職場体験プログラムに関する英文を読み、花が興味のあることや、職場体験先のパン店が困っていること、その原因などを読み取るタスクに取り組む。それに続くGoal Activity [Read]では、『捨てないパン屋』の田村陽至（ようじ）さんについて書かれた220語程度の英文記事を読み、概要を捉えることを目指して、Guide の補助タスクで田村さんが経験したことや、パン店で直面した問題を整理し、Goalのメインタスクで記事のあらましを読み取る。GuideとGoalという2つのタスク構成はこれまでの*NEW CROWN*でも取り入れられていたが、今回はそれに加えて、各Partでの読みの活動がGoal Activityの下支えになるように、より直接的なつながりを持たせることを意識した内容構成になっている。

長い英文を読むという行為は、生徒にとって決して容易なことではない。生徒が英文を理解できるように、あの手この手でたくさんの補助をつけてあげることもできるが、それでは自力で読む力はなかなか伸びない。生徒が英文の量と難しさに圧倒されて、読むことをあきらめてしまうようなことがないように、新たなレッスン構成で生徒の学びをサポートしたい。

読んだ後に取り組むポストリーディング活動と「ふり返り」

GuideとGoalの2つのタスクで要点や概要を読み取った後に、読んだ内容に関して自分の考えや意見を話したり、書いたりする活動に取り組む。これは英文を「読みっぱなし」にしないための工夫であると同時に、読んだ内容を自分と関連付けさせることにもつながる。例えば上述の2年Lesson 3では、「記事についてもっと知りたいことは何ですか。田村さんに質問したいことを考えよう。」という質問が用意されている。この活動の質問を作る際には、読んだ英文と同じレベルの英語を使わなければ答えられないようなものではなく、生徒にとって親しみやすく考えやすい内容であり、それまでの既習事項で十分に答えられるものになるように留意した。

さらに、Goal Activityには「ふり返り」のためのチェックリストが付属しており、「思考・判断・表現しながら活動に取り組んだか」「主体的に活動に取り組んだか」の2つの観点から、生徒が自らの学びをふり返ることができるようになっている。

「題材の*NEW CROWN*」らしさも健在

ここまで述べたように、新しい*NEW CROWN*のレッスン構成は大きく変わった。「読むこと」の指導に関しても、生徒があきらめずに最後まで英文と向き合って読み進められるように、これまで以上に手厚いサポートが盛り込まれた紙面になっている。もしかしたら読者の中には、「*NEW CROWN*らしい読み応えのある骨太の英文は消えてしまったのか？」と不安に思う方がいるかもしれない。心配ご無用、メインのレッスンのほか、読むことに特化したReading Lessonと、巻末資料のFurther Readingも用意している。

このように新しい*NEW CROWN*では、段階を踏んだていねいな指導と、生徒に少し背伸びをさせて挑戦させる指導の両方が可能となり、メリハリのある「読むこと」の指導を実現できる。

2年 Lesson 3 Goal Activity

小中連携

出会い、伝え合い、深め合う：会話で広げる仲間づくりの輪

坂本 南美
（同志社大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

やり取りを軸にした接続期の指導

１年生の春に扱うStarterやLesson １は、小学校での学びと中学校でのスタートを重ね合わせるセクションと捉えよう。新しく出会ったクラスメイトや先生、ALTとともにクラスコミュニティを築いていくこの時期、英語授業では小中接続期における「やり取り」の活動を積極的に取り入れ、互いを知り合いながら温かなつながりを紡いでいく時間としたい。時期の「重ね」と人の「重ね」である。

「何が好き？」「同じだね！」「ダンスを習っているの？」など、教室では自然なやり取りで多様な視点から互いを知り合う機会を創り出していく。教科書では、少しずつ話題の焦点を変えながらさまざまな場面が設定されている。それぞれの設定を活用し、小学校で学んだ英語表現を確認したあと、即興でのやり取りへと発展させ、生徒が「英語を操る自分」を楽しむ時間としていきたい。仲間づくりの輪を広げるこの時期だからこそ、あたたかい空気の中で、生徒たちを意味のあるやり取りの世界へいざなおう。

Starter

Starterのコンセプトは「クラスメイトを知ろう」である。英語授業での小さなやり取りの積み重ねは、自分のクラスには誰がいるのか、彼らはそれぞれどのような生徒なのかなど、互いを知り合う第一歩となる。それはまさに始まったばかりの１年を共に過ごすクラスづくりへとつながる。ここでは小学校で習った表現をどんどん使って、ALTも交えながらたくさん話す機会を設けて授業を展開したい。

Starter １〜２に配置されている「サイコロトーク」は、ペアやグループで生徒がサイコロを振って、半分は偶発的に、また半分は予定調和的にやり取りの話題が設定される。ゲーム性も帯びているので、リラックスした雰囲気の中で小学校の復習も兼ねたやり取りができる。Starter ３〜４では、会話を通して得られた情報を書き取ってまとめる作業も用意されており、情報を整理しながら、話題を広げていける。

Starter １「好きなものを教えて！」

ここでは、クラスメイトの好きな教科をビンゴシートで尋ね合ったあと、より自由なやり取りへと活動を広げる。サイコロトークの円盤に広がる目には多様な話題が用意されていて、小学校での既習事項をたくさん使うことができる。リズムよく会話を進めてもよいし、１つの話題について深めながら話すこともできる。

対話例　A: What color do you like?
B: I like blue. It's cool. How about you?
A: I like green. Look. My pencil case is green.

できるだけたくさんやり取りする機会が作れるように、「１分間に２人で合計６回以上サイコロトークを行いましょう。」と目標の時間と回数を設定したり、タイマーを設定してペアの相手をどんどん変えていったりすることもできる。

Starter ２「好きなキャラクターは？」

Starter ２では、テーマを「人」に変えてやり取りする。好きなキャラクターを尋ね合って書き取るペア活動を行ったあと、２度目のサイコロトークが用意されており、歌手やスポーツ選手など、さまざまなジャンルの「人」について話す。小学校でもふれてきた人やキャラクターを描写する表現を加えることで、より自然なやり取りが展開できる。

また、Starter １〜２では、小学校から使ってきたつなぎことばや、リアクションの表現が添えられている。「聞き手」としての姿勢を育むこれらの表現は、１年生の初めにぜひ習慣づけていきたい。

Starter 3「ランキングを作ろう！」／Starter 4「どこに行ってみたい？」

Starter 3では、「日曜日の過ごし方」「朝食に食べるもの」などについてアンケートをとり、ランキングにまとめるという目的が設定されている。やり取りから得た情報を整理して、グループやクラスで紹介し合う中で、クラスコミュニティへの所属感も高めていけるとよい。また、習い事や動作、食べ物など、小学校でふれてきた表現を幅広く使うテーマが提示されているため、My Dictionaryを積極的に活用しながら、語句・表現を思い起こさせたい。

Starter 4では、生徒の身の回りの話題から外の世界へと視点が移り、行ってみたい国や地域をグループで調べ、ランキングにまとめる。この活動では、タブレットなどを用いて、名所や思い出の場所などを検索する時間を設けることもできる。

対話例

A: Where do you want to go?

B: I want to go to Kyoto.

A: Me, too! I want to see Kinkakuji.

Lesson 1 “About Me”

*NEW CROWN*のキャラクターたちは、生徒と同じく、中学校に入学し、新しい環境の中で出会いを経験し、新しい友だちを作りながら学校生活に馴染んでいく。Lesson 1では、そんな彼らの会話から英語表現を学び、生徒も自分のことについて話したり、書いたりする経験を重ね、単元末の活動ではプロフィールカードを作成し、それを交換してやり取りする。

とびら：まずは話してみる

Sceneでキャラクターたちの会話を聞いたあと、Name Cardを作成し、ペアで自己紹介をする活動から入る。Name Cardに記載するのは「名前」と、Starterでも扱っている「好きな色」と「好きな教科」だ。

Part 1〜3：やり取りのスキルアップ

Partでは、キャラクターたちの対話を聞いたり、生徒自身が発話したことを整理したりしながら、ターゲット文法を整理し、本文を参考にやり取りや発表の工夫を学ぶことができる。Part 1では、クラスメイトやALTへの自己紹介を通して、be動詞と一般動詞を整理する。また、一方的なスピーチで終わらないように、キャラクターの会話やExpressionsを参考に、聞き手のあいづち表現などを意識させる。Part 2〜3では、疑問文を学びながらインタビュー活動を行う。この際、さらに質問を重ねるフォローアップ・クエスチョンや会話を継続させるスキルを身につけさせたい。また、徐々に時間制限を設けるなどして、少し負荷をかけた状態で活動させることで、小学校のときよりもスキルアップしたやり取りができるように指導したい。

Goal Activity：中学生らしい自己紹介

指導書に用意されるプロフィールカードのデータを印刷・配布して活動に取り組ませる。カードには、Starterなどで話してきた「名前」や「好きなこと」だけでなく、生徒が自由にテーマを選択できる「ベスト3」を紹介するスペースが設けられている。自己紹介はStarterから何度もくり返し行っているため、そのことを踏まえて相手が知らないことを取り入れるように意識させると、クラスメイトの新しい一面を知ることができるかもしれないし、意外な共通点を発見することもあるかもしれない。相手意識をもたせることで、中学生らしい自己紹介をさせられるとよい。

英語学習のステップは、直線的に発展するようにも見えるが、実は螺旋（らせん）階段のようなものでもあるといえるだろう。少しずつ、なだらかなスロープをのぼりながら一周回って戻ってくると、同じポイントでも気がつけば以前より学習ステージが上がっている。小学校と中学校で表現が同じでも、扱うトピックや状況を少し複雑にすることによって、より詳細に、より思考力を駆使して英語を「操る」ことができるようになる。1年生の春は、そのような螺旋階段を少しずつ確かな足取りで上がっていく感覚を生徒に身につけてほしい。そして、目的を意識したやり取りを通して、英語が他者とつながるための「ことば」であり、英語を「操る」ことは意味のある営みであることを実感してほしい。

NEW CROWNとわたし

*NEW CROWN*の伝統と革新

昭和・平成・令和と時代を駆け抜けてきた*NEW CROWN*の新たな船出です。昭和から平成の前半は、題材にチャレンジした時代でした。いわゆる骨太の題材がこのときに次々と世の中に送り出されました。平成の後半から令和は、言語活動にチャレンジした時代でした。骨太の題材に骨太の言語活動を肉づけしてきました。この時代の*NEW CROWN*では、言語活動のオーセンティシティが格段に高まりました。

時代は令和に入り、*NEW CROWN*はさらに新しい時代を迎えました。「骨太な」題材と「骨太な」言語活動は、ときに使う者を怯（ひる）ませてきたかもしれません。今回は、使い勝手に真正面から向き合っています。新しい題材にも、馴染みのない言語活動にも、怯むことなくわくわくと取り組むことができるでしょう。使い手ファーストの新しい*NEW CROWN*を是非お手にとってみてください。

根岸 雅史
（東京外国語大学）

単元計画

1年生の「伝えたい気持ち」を育てるための単元構想

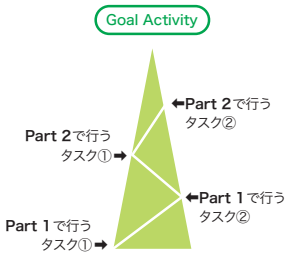
宮﨑 直哉
（掛川市教育委員会）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

単元構想を考える時に意識していること

単元のゴールとなるGoal Activityは、技能を統合的に使うものが多い。Goal Activityは知識・技能だけではなく、生徒自身が思考・判断・表現することが主になるため、突然その活動に取り組んでもすぐに達成できない。仮に達成できたとしても内容に深みが出ないだろう。そこで、単元を通した授業展開が重要になる。各Partの学習内容や授業の進め方しだいで、Goal Activityも達成可能になるからだ。そのため、私は単元構想を考える上で、Goal Activityを最初に確認する。以下に2パターンの単元構想のイメージを示す。

図1．Goalに向けて各Partで高める



※各Partで行うタスクはGoal Activityを達成するための技術や知識的な足場かけとする。

図2．各Partの学習内容で表現や考えを広める

※各Partで行うタスクを通して、さまざまな考えにふれたり表現の幅を広げたりして題材に対しての考えや自らの意見を膨らませる。

図1のパターンでは、単元をGoal Activityに向かっていくプロジェクトのような形で考える。例えば、単元を通して生徒が学んだ内容をもとにポスター発表のような形でプレゼンテーションする活動であれば、発表のために必要な表現技能を徐々に身につけさせていく。また、技能を身につけるだけのドリル練習では形式と意味が生徒に身体化されにくいため、各Partで活動に取り組みながら実際に英語表現の形式と意味に慣れ親しみ、単元末にそれらを使って、発表活動に取り組めるようにする。

図2のパターンでは、題材への理解を重視して単元を構成していく。このパターンは物語教材や、人の生き方や他者との関わりなどにふれる題材が扱われている単元に適しているだろう。単元を通して、生徒が個々に学んだことや感じたことを英語で表現し、それらを共有するという点は図1と同じであるが、より内容理解に重点を置き、そこから何を学んだかということを表現し合うことで、生徒の考えを膨らませていくことを重視している。そのため、自分の考えを生徒自身でつかむことができるように、考えたことや感じたことを短文であっても英語で書かせるようにする。

なお、実際の授業では片方のパターンに偏るのではなく、図1・2の両方を活かしたり、単元全体としては図1のパターンを意識しながらも、各Partの学習では図2で進めたりすることも考えられる。

単元構想例

1年Lesson 6 “School Life in the U.S.A.” では、単元を通してアメリカの学校生活について知り、Goal Activityではアメリカの中学生から送られてきたメールを読み、その上で日本の学校生活や行事を紹介する活動が用意されている。

まず、図1の方法をとる場合を考えてみよう。Goal Activityでは自分の学校のことを海外の中学生に紹介することになっているが、現実的に生徒が海外の人にメールを送る機会はそれほど多くないだろう。そこで学級内で英語でやり取りする機会を増やすために、例えば、「グループで自分たちの理想の学校を考え、紹介し合う活動」に変えてみる。理想の時間割、理想のランチタイム、理想の校舎図などを作成し、単元末にはその学校のパンフレットを英語で作成する。一見すると難易度が高く、時間も必要になりそうだが、教科書の各Partの本文やタスクを足場かけとすれば、無理なく取り組める。

初めから生徒自身がすべての内容を考え、英語で表現することは困難だが、教科書の本文を参照資料として活用すれば可能である。例えば、Part 1ではマークが一人語りで、写真を描写しながらアメリカの学校の休み時間について説明し、Part 2では対話文でランチタイムについて紹介されている。これらの本文から、学校生活を英語で説明する表現にふれ、理想の学校のイメージを膨らませ、少しずつ英語で表現していくことができる。また、Part 1～2のThink about Yourselfでは本文を参考に、写真を描写しながら日本の学校のことを短い英語で表現する活動が用意されており、これもGoal Activityにつながるステップになるだろう。Goal Activityに用意されているメール文も、使う表現や英文の構成を考える上で役立つ。料理が好

きな生徒が集まったら、次のような学校を考えるかもしれない。

> This is a picture of my favorite class. We are studying history. We are reading a book about the history of pizza! At my school, all students study cooking! We can learn cooking styles around the world like French, Italian, and Chinese! (列挙) Many students take pastry course, too.（緑字は本文で使われている表現）
>
> 写真の描写
>
> 詳しい説明

このように、本文を言い換えたり、表現をアレンジしたりすることで、英文の作成も容易になる。各Partの学習内容を用いて、１段ずつ階段を登っていくイメージで単元を構成すれば、Goal Activityのような思考・判断・表現を伴う活動も十分、達成可能だろう。

次に、図2のパターンで考えてみる。私が授業者だったら、単元の最初にGoal Activityに取り組み、学校生活についてどの程度英語で表現できるかを試させたい。これは口頭表現でも筆記の表現でもよいが、学校の日常生活について語ることが想像以上に難しいということを生徒は感じるのではないだろうか。自分の表現力が十分ではないことを実感することで、この後に本文を読む意味が生まれる。１年生の単元構想を考える上では、語彙や表現の量を増やすためにも、発信と受信をどれだけ強く結びつけられるかが大事になる。

Part １ではマークの説明を読むことが主になるが、単元に入る前に学校生活に関する知識が喚起されていれば、理解にはそれほど苦労しないだろう。ところが、「本文を参考に、自分たちの休み時間の過ごし方を英語で伝えよう」と言えば、生徒は戸惑うかもしれない。理解することと表現することの間には差があるからだ。そこで、以下のように、まずは本文を１文ずつ自分のことに置き換えて表現させてみる。

> At our school, students can't choose their classes. Each class has the same schedule. This is a picture of a short break between classes. The students are walking to their next class. They are all going to their P.E. class.（緑字は本文で使われている表現）

次に、キーワードを提示し、それらを使うことで少しずつ生徒のオリジナルの文になるように促す。

> キーワード：during / every / often / usually / stay in ... / talk with ... / teacher / classroom / seat / locker ...
>
> 例：　At our school, each class has the same schedule. During a short break, students usually stay in the classroom. Teachers come to the classroom. ...

Part ２のように本文が対話文のときは、上記の方法では不自然な対話が生まれるため、アレンジする必要がある。Goal Activityで「日本の学校生活を英語で表現する」ということをふまえて表現活動までもっていくことができるとよいだろう。例えば、自分たちはどのような形で昼食をとっているか、好きなメニューは何か、理想の組み合わせのメニューは何かといったことは、簡単な英語で話せるため、１年生でもペア活動などで、英語でやり取りできるだろう。

ここまで表現を広げる工夫を紹介してきたが、題材に対して考えを膨らませるためにもう一工夫したい。Goal Activityのメール文では、書き手のお気に入りの授業が紹介されている。生徒には本当に自分が好きな授業を紹介してもらうべきだし、その方が表現も豊かで深いものになるが、あえて苦手な教科や行事も一緒に紹介させてみてはどうだろうか。好きなものだけでなく、苦手なものも紹介することで生徒同士が共感し合い、対話を生むきっかけになることもあるし、「苦手なこともあるけど、学校にはこういう良いところもある」と、何気ない日々の生活を生徒自身が評価し、価値や意味を見出すことにもつながるだろう。また、ここで重要な点は、Goal Activityの「日本の学校生活をメールで伝える」という目的や、「送る相手は海外の友人である」という場面設定を意識することだ。読み手のことを考えれば、ネガティブな内容に偏りすぎずに自分の考えを伝えるだろう。

単元構想を考える上で、教科書の題材は大きな比重を占めるが、どのような題材であっても、単元を通して生徒が英語で表現する活動を行うことで、「充実した内容を伝えたい」「相手を惹きつけることを話したい」という思いを生徒に持たせたい。１年生では、突然まとまりのある英語表現をさせようとしても難しいが、単元の中で段階的に表現活動を続けることで生徒自身の表現力を高めたり、題材に対して考えや視野を広げたりすることはできる。また、表現することで、元となる題材の理解が必要になり、本文理解と表現の力が相乗的に高まるだろう。紹介したように、各Partで小さなタスクを複数回仕組み、Goal Activityに向かう授業を行えば、内容理解を助け、英語表現を広げるだけでなく、生徒の伝えたいという意欲を次第に育てることができるはずである。

NEW CROWNとわたし

おすすめポイントは指導計画の立てやすさ

教材研究や授業準備は楽しいのだけれど、指導計画の作成には頭を悩ませることがある。そんな先生方への、新しい*NEW CROWN*の最大のおすすめポイントは、一貫性のある指導計画の作成に適したレッスン構成です。*NEW CROWN*には、Goal Activityがあり、その活動はレッスンの内容や言語材料を活用して、本課の目標を達成するためのものとなっています。例えば、２年Lesson 2 "Fun with Books"のGoal Activityは、「理由を付け加えて、日本語の本や物語を紹介しよう。」です。ブラウン先生のおすすめの本を陸が借りるという本文の内容や、I think that .... や接続詞whenなどの言語材料を活用できる言語活動になっています。このように、新しい教科書では目標・指導・評価の筋道が一貫しているため、指導計画が非常に立てやすくなっています。授業作りのやりがいも、きっと倍増することでしょう。

樫葉 みつ子
（元 広島大学）

Part

ストーリーを活用した基本文の導入

中島 真紀子
（筑波大学附属中学校）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

Small TalkからScene 1につなぐ

新しいNEW CROWNのPartのSmall TalkからCheckの基本文導入につなぐ指導方法を考える。新しいNEW CROWNでは、Lessonを通して内容がつながっており、Scene 1の登場人物の会話や発表から基本文が取り出されているため、ストーリーを通して基本文を導入することが可能となっている。そのため、Scene 1の続きであるScene 2の内容はもちろんのこと、Lesson全体を踏まえながら導入を行いたい。ストーリー展開を活用することで、生徒は教科書の題材に興味を持って取り組むことができる。題材と生徒の距離を縮める工夫としては、例えばSceneを扱う前に、題材に関連した教師自身の経験を語ったり、Partの冒頭にあるSmall Talkを活用したりしたい。その際、ティーチャートークの中に基本文を盛り込み、生徒に「どんなことを言っているのかな」と想像させながら聞かせることで、効果的なインプットとなるよう心がけたい。

以下、2年Lesson 5 Part 1 Scene 1の授業の流れを示す。

ねらい：〈show+A+B〉の形式と意味を理解し、実際に使うことができる。
Scene 1の場面・状況を理解する。

授業の始まりからSmall Talkまで

教師が海外旅行のお土産でもらったドリームキャッチャー（写真）を取り上げ、導入する。

〈発話例〉

T: To begin with, I will show you a picture. Look at this. What is it?
Ss: なにあれ？ / I don't know. / ドリームキャッチャー？
T: Yes. This is a dream catcher. It's a souvenir from my friend. She bought me this in Canada.（くり返す）

When she gave me this dream catcher（くり返す），I was very happy. My friend told me about her trip to Canada. Now I really want to go to Canada.
Q1. Do you know anything about Canada?
Q2. Do you want to go to Canada?
Q3. Which country do you want to go to?

※Checkの基本文に関連する文（下線部）は、ゆっくりはっきり、くり返し伝える。
※世界地図を見せるなど、Visual Aidsを効果的に活用する。
※最後の質問(Q3)はSmall Talkのトピックである。この質問では生徒同士でチャットをさせ、その内容をクラスで共有する。Q1とQ2に関しては、生徒に投げかけるだけでもよいし、何人かの生徒を指名して答えてもらうなど、生徒とのインタラクションに使用することもできる。

Small Talkの活動

Small Talkで、できるだけたくさんの生徒に、行きたい国とその理由とを発表させ、世界地図を見ながら挙がった国の位置を確認する。生徒からオーストラリアが挙げられた場合は、そこからScene 1につなげる。もし出なかった場合にはケイトの絵を見せ、"Does anyone want to visit Australia? Kate is from Australia."とつなげてもよい。

〈発話例〉

T: S1 and S2 want to go to Australia. Do you remember that Kate is from Australia?
Ss: Yes.
T: Actually, Kate went back to Australia during the summer vacation.

Scene 1からCheckにつなぐ

ここでは、①Checkの基本文の確認と練習の後、Scene 1の内容に入るパターンと、②Scene 1の内容理解の後、Checkの基本文の確認と練習を行うパターンの2種類を紹介する。

①Checkの基本文の確認と練習の後、Scene 1の内容に入る

〈発話例（Checkの基本文の確認と練習）〉

T: Kate visited her aunt (Kate went to her aunt's house) and went sightseeing every day. Now she is showing Riku some pictures.

イラスト：Vladimir / PIXTA

2年 Lesson 5 Part 1 Scene 1

Part 3 Side Story

ケイトと陸の会話を聞いて、ケイトが写真を見せている様子がわかる文を聞き取ってみよう。（Scene 1の音声を聞く）
ケイトは何と言って陸に写真を見せていたかな？（必要があれば、複数回聞かせる）

Ss: ... show you ... picture ... / I'll show you some pictures.

T: That's right. Kate said, "I'll show you some pictures."

※ここで、ケイトが陸に写真を見せているScene 1の絵とCheckの基本文を見せて、〈show+A+B〉のform（形式）やmeaning（意味）を明示的に説明する。生徒の実態に合わせ、ティーチャートークで示した〈buy (give)+A+B〉も一緒に示したい。説明した後は、Exerciseを活用して練習を行い、形式や意味の理解に留めず、それらの文が実際にどのように使われるのかを生徒に体験させる。練習の後はScene 1の内容理解へと進む。

〈発話例（Scene 1の内容理解）〉

T: OK, everyone. (Scene 1の絵を見せながら) Kate said, "I will show you some pictures." Then Kate is showing Riku some pictures. When Riku saw the pictures, he said, "Oh!" Riku was surprised. Why was he surprised?
(Scene 1の音声を聞かせる)

T: Why was Riku surprised? (＊)

Ss: Because Kate was wearing a coat and gloves.

T: That's right. Why was she wearing a coat and gloves?

Ss: Because it was the middle of winter. / 冬だから！

T: Kate visited Australia during the summer vacation. It was summer in Japan. But it was the middle of winter. Why?

Ss: 日本と季節が逆だから！

T: That's right. The seasons are opposite. Did Riku know about that?

Ss: Yes. / 知ってる。

T: Yes. Riku said, "Oh, that's right."「そうだよね。/ そうだった。」So he knows that the seasons are opposite.

※ここで生徒はすでに一度会話を聞いている。"Why was he surprised?"の質問に生徒が答えることができれば、確認のために音声を聞かせる。答えられないようだったら、必要に応じて複数回聞かせる。

※ここでは会話の内容理解を重視するので、生徒の実態に応じて日本語でやり取りしてもよい。また、必要に応じて音声を複数回聞かせたい。Checkの基本文の導入と題材の導入が重要な目的であるため、会話文を詳細に説明する必要はないが、教師と生徒とのインタラクションを楽しみながら内容を理解しているかどうかを確認したい。その後、Scene 2へと進む。

②Scene 1の内容理解の後、Checkの基本文の確認と練習を行う

T: Now Kate is showing Riku some pictures and talking about her trip to Australia. What did she do in Australia? Let's listen to their conversation.
(Scene 1の音声を聞かせる)

T: What did Kate do in Australia?

S3: She went to her aunt's house in Sydney.

S4: She went sightseeing every day.

T: That's right. Then, Kate said, "I'll show you some pictures." Now she is showing Riku some pictures.
(Scene 1の絵を見せる)
When Riku saw the pictures, he said, "Oh!" Riku was surprised. Why was he surprised?
(必要に応じて、音声をもう一度聞かせる)

T: Let's listen to their conversation one more time.

※日本語でやり取りしてもよい。この後は、左段（＊）以降のやり取りを続け、内容を確認したら、Checkの基本文の確認と練習に進む。

Part 3 Side Story の活用法

次にPart 3 Side Storyの活用法を紹介する。まずは、Side Storyの絵を見せながら、場面・状況を導入する。前時に扱ったPart 2の内容を踏まえて導入するとよい。導入後、ツアーガイドのベティーと芸術家のバランガさんの会話を聞き、質問（Q）「会話のあと、バランガさんは何をするか」につなげたい。

ねらい：〈how+to+動詞の原形〉の形式と意味を理解し、実際に使うことができる。
Side Storyの内容を理解する。

〈発話例（場面・状況の導入）〉

T: Riku is joining an online tour of Uluru. Now, Betty is interviewing Mr. Barunga.
T: Mr. Barunga is Anangu. Who are the Anangu?
Ss: Native people in Australia.
T: Right. Something is very important for the Anangu. What is it?
Ss: Uluru.
T: Yes. Why is it important?
Ss: Because it is a sacred place for the Anangu.
T: That's right. Now, as I said, Betty is interviewing Mr. Barunga about his Anangu art. He is an artist. Riku has a chance to ask some questions. If you were Riku, what questions would you want to ask?
（Side Storyの絵を見せる）

※アナング族の人々に質問できるとしたらどんな質問がしたいか生徒に投げかける。前時に扱った内容が出てくるとよい。
質問例：Do you live near Uluru? / Why did you become an artist? / Are there many artists of Anangu art?

次に、絵を見ながら会話を聞き、「会話のあと、バランガさんは何をするか」の質問（Q）を投げかけ、考えさせる。

〈発話例（会話の内容理解）〉

T: Betty is asking Mr. Barunga about Anangu art. Listen to their conversation.
（絵を見ながら、会話を聞く）
T: What will Mr. Barunga do after the conversation?
Ss: 絵を描く。/ He will paint a picture.
T: That's right. How did you know that he will paint a picture?
（これから絵を描くってなんでわかったの？…こんなふうに言ってたね。）

※生徒が質問（Q）を理解できていない様子の場合、音声をもう一度聞かせる。日本語でやり取りしてもよい。
※発話例の最後の投げかけに対する答え（I'll show you how to paint with them.）が生徒の中から出てこない場合を想定し、提示してしまってもよい。

続いて〈how+to+動詞の原形〉のform（形式）やmeaning（意味）を明示的に説明する。説明した後は、Exerciseを活用して練習を行い、形式や意味の理解に留めず、実際にどのように使われるのかを生徒に体験させる。

Exerciseで練習させた後は、もう一度Side Storyに戻り、〈how+to+動詞の原形〉を使った活動を行う。例えば、以下のようなスライドを用意し、（日本語を示して）「バランガさんに伝えてみよう」と生徒に呼びかける。「バランガさんのアートスタジオへの行き方／アナングアートの描き方を教えてください」などの質問が考えられる。

バランガさんのアート（作品）の買い方を教えてください。

もちろん。買い方を教えてあげるよ。

NEW CROWNとわたし

私のおすすめポイント

令和7年度版*NEW CROWN*の私のおすすめポイントは、文法提示です。各レッスンのScene 1にターゲットとなる文法が提示され、導入の大きなイラストでは、どのような場面でその文法が使用されるかが、一目でわかるようになっています。教科書にある質問の答えを生徒に考えさせることで、その文法の意味を推測させたり、一緒に確認したりできます。イラストの下には基本文が示され、レッスン末のLanguage Focusには、その文法の形式が詳しく示されています。一般に、文法知識の獲得のためには、使用（Use）、意味（Meaning）、形式（Form）の3つの要素が重要だと言われています。新しい教科書では、Use → Meaning → Formの最適な順序で新しい文法を提示することができ、無理のない形で文法への気づきを促すことができる流れになっています。

田中 武夫
（山梨大学）

題材紹介 ①

07NCでは、生徒が題材を自身と結びつけて考え、それを英語で表現する力を養えるように、リアルで身近な題材を多く選定しています。その一部を紹介します。

1年 Lesson 9

Emergency Food

近年、地球規模の気候変動に伴う自然災害が増え、防災への対策がますます重要になっている。中でも非常食は命をつなぐ根幹であり、生徒たちの関心も高い題材だろう。熊本の高校生が取り組んだ非常食開発の記事を読んで、中学生も自分たちの地元の食材で非常食になりそうなものはないか、どのような非常食が災害時にあると嬉しいかなどを考える機会にしてほしい。小学校でも防災について学んだ生徒には継続して防災意識を持ち、それを深める好機になるだろう。

（**松宮 奈賀子**　広島大学）

Safe Clean Water

ディヌーと花が、安全な飲み水が当たり前のものではないことを、クイズやグラフを活用して発表し、陸とジンは姉妹校の生徒に紙の再利用を提案する。日々の生活に欠かせない水や紙を通じて身近な環境問題を考えるきっかけにできるだけでなく、原因と結果、問題点と解決策といった談話の構成やデータに基づく発表の仕方、さらに発表準備の過程のやり取りから話題の広げ方を学ぶことができる。提案・説得のための言語使用を追究しつつ、科学的思考を深めたい。

（**亘理 陽一**　中京大学）

2年 Lesson 4

2年 Reading Lesson 2

Online Experiences

このバーチャルサファリは、テクノロジーがどのように私たちの日常の生活や体験に変革をもたらしているかを示しており、生徒が現代の技術の進歩とその可能性を学ぶ良い機会となるだろう。ナイロビ国立公園は、多くの野生動物の生息地となっており、この題材を通じて、生物の多様性や環境保護の重要性についての意識を高め、テクノロジーの影響や環境保護の意義、そして実際の体験とバーチャル体験の違いなどについてディスカッションを促したい。

（**佐藤 臨太郎**　奈良教育大学）

Translating Culture

日本の漫画やアニメが海外に幅広く普及していることは既に知られている。今回は世界で人気のある漫画やアニメの、言葉や文化を翻訳するというところに焦点を当てている。どんな工夫をすると異文化の人にわかりやすい翻訳ができるのか？ 少人数のグループなどで話し合ってみるのもよいのではないだろうか。想像力と創造力を使って、4コマ漫画の翻訳に取り組んでほしい。もしかしたら、日本語よりおもしろいものができるかもしれない！？

（**大島 希巳江**　神奈川大学）

3年 Lesson 5

©Yuki Suetsugu

Small Talk Plus

継続的、段階的に行う話すこと「やり取り」の指導

駒澤 正人
（千代田区立麹町中学校）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

話すこと「やり取り」の指導で目指す生徒の姿

「やり取り」はさまざまな目的や場面、状況で行われる。日常で行われるたわいのない会話、カフェなどの店で必要な情報を伝え合うために行われる会話、集団で日常的・社会的課題を解決するために行われる話し合いやディベートなど、その場面は多岐にわたる。学習指導要領においても以下のように大きく3つの主な話題が示されている。

ア　関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
イ　日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
ウ　社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。
（学習指導要領 外国語 第2節 1目標（3）話すこと［やり取り］）

目標となる場面、話題は異なるものの、「やり取り」で身につけるべき力は一貫しており、「事実や相互の考え、思い」を「即興で伝え合う／述べ合う」力であり、この力の育成を指導の軸として常に意識し、3年間の指導を通して、継続的、段階的に行うことが「やり取り」の指導を行う上で重要であると考える。

*07NC*では、継続的、段階的な「やり取り」の指導を各学年で適宜指導できるようSmall Talk Plusというパートを設定し、自然なやり取りを達成するために必要なスキル、要素（以下ターゲットスキル）が指導できるよう工夫されている。各学年で設定されている主な指導項目を整理すると以下のようになる。

1年　・相手の発言を受けて、リアクションしたり、さらに詳しい内容を質問したりする。
　　・相手の発言を受けて、リアクションしたり、感想を伝えたりする。
2年　・話された内容に関連した質問をする。
　　・伝える順を意識しながら複数の文で伝える。
　　・自分の考えとその理由や根拠を伝える。
3年　・確認したり聞き返したりして、会話を深める。
　　・相手の意見を受け止めてから自分の意見を伝える。
　　・発言の意図を確認し、スムーズにやり取りを進める。

段階的に設定されたSmall Talk Plusを、年間を通した指導の中で計画的に扱い、それらの要素を継続して活用させることで、円滑に「やり取り」の力を育成することができる構成となっている。

これらの系統立てられたスキルの習得に加え、指導の際に留意すべき事項として、以下の3点を心がけたい。

❶会話の継続性を高めるために、自然な会話（普段生徒たちが日本語で行う会話、討議など）をイメージさせ、会話を分析させる。
❷思考力、判断力、表現力を伸ばすために、モデルスキットに倣うような活動ではなく、自分で創作する活動を基本とする。
❸間違えることを恐れず、（単語の羅列でもよいので）伝えようとする態度を大切にする。

※特に❷は、即興のやり取りの活動を行った時に生徒がよく口にする「次に何を言えばいいのかわからない」という課題を解決するために重要である。

実際の指導例

2年Lesson 5のSmall Talk Plusは、2学期に実施されることが想定され、年間の学習過程の中間地点にあたる。この時期までの指導により、生徒は質問、回答、反応などのリアクションをくり返し、会話を継続して行うことが期待される。

Small Talk Plusの構成は、次の通りである。

1 導入となるペアトーク
2 ターゲットスキルのインプット
3 ターゲットスキルのインテイク（習熟活動）
4 ターゲットスキルを駆使したアウトプット活動

これを基本として、生徒の実態に応じて授業をデザインする。

トークテーマである“Where is a good place to visit in our town?”を実際のクラスで尋ねた時、生徒はどのような回答をするかを検討す

るとよいだろう。その様子から必要な補助活動が何かを考え、構成を整えることで、生徒の実態に応じた授業を展開することができる。

例えば、普段の授業で会話があまり続かない傾向にあるクラスでは、やり取りの継続性を高めるために、「次に何を言うべきかを考えさせる」活動を補う必要がある。また、質問に応えようとする姿勢が十分に身についていない雰囲気のクラスなら、普段の授業で形式張らない英語によるやり取りを行い、英語でのコミュニケーションに慣れさせる必要があるかもしれない。Small Talk Plusの導入の段階においても、既習スキルを活用しながらやり取りを多く行い、会話をしようとする雰囲気を作り出していく。このような補助活動を取り入れて、活動をデザインすると次のようになる。

《Round 1》導入

（1）Teacher Talkによる導入

クラス全体でやり取りをしながら、会話しようとする雰囲気を作ったり、トークテーマの理解を図ったりする。

（2）生徒同士のペアトーク

パソコンやタブレットPCの録画、録音、ディクテーション機能などを用いて記録する。会話を継続しようとする力を育てるために、会話のポイントなどは示さず、会話のキャッチボールを止めないことだけに留意させたい。

《Round 1 / TIME OUT》 インプット

（1）分析による課題把握

１年次より学習してきたやり取りの評価基準をまとめたものを参考に、「導入（2）」で記録した会話を分析し、より自然な会話にするための課題を考え、ワークシート等に記入し、クラス全体で共有する。ちなみに、ここで扱うワークシートは年間を通じて記入できるものが望ましく、生徒が自分のやり取りをふり返るためだけではなく、過去の取り組みを生かすために活用できるようにすることで、さらに学習効果が期待できると考える。

（2）ターゲットスキルの提示

本時のねらいとなるターゲットスキルを提示し、その意味や機能を説明する。生徒は（1）で分析した会話を元に、会話のどこで、どのようにそのスキルを使うことができるかを考え、会話の質と量の向上を図る。

2年Lesson 5
Small Talk Plus

（3）生徒同士のペアトーク（再）

改善したい点に注意しながら、同じペアで再び会話をする。

《Round 2》インテイク

同じトークテーマであっても、ペアを変えて会話することで細かな部分が異なり、会話の向かう方向が大きく変わる。会話の度に、評価基準に照らし合わせ、十分にやり取りできたかを分析させることで、思考力、判断力、表現力の育成につなげることができる。

《Round 3》アウトプット

ターゲットスキルを中心に、「インプット（1）」で示したやり取りの評価基準を再度確認させたあと、Round 3のトークテーマを用いて会話に取り組ませ、ターゲットスキルの理解を確かめる。

まとめ

本時でのやり取りについてふり返りを行い、学習成果と今後の課題をまとめさせることで、今後の学習につなげていく。

生徒のやり取りする力は日々の授業で少しずつ伸びていく。そのため、Small Talk Plusを指導するときに完結させ、結果を見ようとするのではなく、次のSmall Talk Plusに向けてさまざまな場面で継続して指導を行うことが重要である。その後も3年の指導が終わるまで適宜ふり返りながら、長いスパンで習熟できるよう指導していくことが必要となる。また、表現の正確性の育成についても注意を向けながら、即興性のある英語の表現活動に取り組むことで「事実や相互の考え、思い」を「即興で伝え合う／述べ合う」力を育成していきたい。

NEW CROWNとわたし

*NEW CROWN*の教材が持つ力 —I Have a Dreamをめぐって

音読テストでは、一週間前に実施日と範囲を生徒に連絡し、教科書準拠のCDと同じように本文を読めるように何度も練習しておくことを指示します。教師は、学習した範囲のレッスン名とページをカードの下に記入し封筒に入れ、生徒は引いたカードの教科書のページを開き、教師の前で音読します。中学3年生の音読テストで、ある生徒が“I have a dream ...”のカードを引いた時のことです。生徒が「先生、スピーチをしてもいいですか？」と尋ねたのです。音読テストでしたが、私は「どうぞ」と言ってしまいました。生徒は「私、この個所をやってみたかったんです。」と言って教科書を閉じ、私の目の前でキング牧師のスピーチをしました。私は思わず拍手をしました。教材に力があると生徒の心に響き、教師の予想を超えるプレゼンテーションをするのだと思いました。「題材の*NEW CROWN*」のなす業でした。

日基 滋之
（拓殖大学）

Goal Activity [Write / Speak]

プロセス・アプローチで自律的に書く・話す力を育てる

興津 紀子
（宮崎大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

はじめに：全国学力・学習状況調査からみえた課題

令和５年度全国学力・学習状況調査では、日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くタスクが出題された。正答率は7.7%で、取り上げたテーマについて具体的に説明していない解答、話題が次々に変わるなど内容に一貫性がみられない解答、問題の趣旨を捉えられていない解答などが報告されている。また、社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すタスクも出題され、正答率は4.2%だった。理由を述べていない解答、話し手の意向を踏まえられていない解答が見られ、「話すこと」と「書くこと」の課題が浮き彫りになった。調査で問われた力は一朝一夕に身につくものではないため、書いたり話したりするプロセスを身につけられるよう、３年間を通してくり返し指導をする必要がある。プロセス・アプローチは、最終プロダクト（例：提出された作文、発表本番）だけでなく、構想、計画、修正などを含むプロセス（手順）を重視し、生徒が自律的な書き手・話し手になるように支援する指導方法である。近年は、読み手・聞き手のニーズを踏まえたプロセスが重視されている。*NEW CROWN*のWrite / Speakが出口になっているGoal Activityでは、読み手・聞き手を意識して、内容と伝え方に創意工夫を凝らすためのプロセスが示されている。本稿では、２つのGoal Activityを例にして、プロセスを指導する際に必要な支援方法を紹介する。

「書くこと」のプロセス・アプローチ

「書くこと」のプロセス・アプローチには、［発想→計画→下書き→読み直し→推敲］の段階がある。１年Lesson 6のGoal Activityをみてみよう。

（1）読み手のニーズを知り、書く目的を明確にする

まず、SETTINGを確認する。英文を書く目的や場面、状況などを知ることは、自分の置かれた立場と読み手のニーズを理解する上で重要な手続きである。ケビンからのメールの内容について、“What is Kevin’s request?”と生徒に問いかけ、返信する目的を明確にしたい。

（2）他者のプロセスやモデルのライティングから学ぶ

二次元コードなどから視聴できるWatchの動画では、メールの差出人であるケビンのライティング・プロセスをたどれる。活動の全体像がつかめるため、見通しを持って作業に取り組むことができる。また、書かれた内容を整理するReadに取り組む際に、ケビンのメールの形式や段落の構成を分析させて、自分が書くときに生かせるようにするのもよいだろう。

（3）プロセスを意識して書く

Step 1 発想

紹介する話題をしぼる際に重要な視点は、「読み手の興味・関心」である。教科書本文に戻り、日本とアメリカの学校生活の共通点や相違点を確認したり、インターネットで調べさせたりして、どの話題を選べば読み手に興味を持ってもらえるのかを考えるよう指導する。

Step 2 計画

前述の調査結果では、取り上げたテーマについて具体的に説明したり、内容に一貫性をもたせたりする指導の必要性が示唆された。この段階では詳しく説明するための支援が必要だろう。写真を描写するキーワードと、それに関連した日本の学校生活の特徴を挙げて、説明の順序を考えたり、情報を補ったりするよう指導する。数人の生徒のメモを見せて解説するとイメージしやすいかもしれない。

Step 3 下書き

現在進行形と現在形を書き分けるように伝えるが、この段階では完璧さを過度に意識させず、ペースよく書き進めるように伝える。

Step 4 読み直し・推敲

時間はかかっても、推敲の段階を必ず入れるようにする。書き終わった生徒には、内容面と言語面に注意して読み直すように伝える。多くの生徒が同じ誤りをしている場合は、全体で共有し、自分で誤りに気づき、修正できるようにサポートする。教師からのフィードバックを受けて書き直すまでが、一連のプロセスである。また、作文をペアで読み合って、学び合うことも効果的だ。

「話すこと[発表]」のプロセス・アプローチ

私たちが話す際、[概念化（何を話すか考える段階）→言語化（どのような言語材料を用いて伝えるか決める段階）→調音化（実際に音声化する段階）] のプロセスを、限られた時間の中で瞬時に実行している。2年Lesson 5 Goal Activityでは、このプロセスを分けて準備したりふり返ったりする。ここでは、前述の1年Lesson 6で紹介したライティングの留意点を省略し、スピーキング特有の指導の留意点を中心に紹介する。

(1) 聞き手のニーズを考え、目的意識を高める

SETTINGを読んで、目的や場面、状況などを明確にしたあと、どのような理由で旅行者が自分の町や地域に来るのかを考えさせる。例えば、ALTに尋ねたり、インターネットで旅行者のニーズを調査したりすることが考えられる。観光案内所、国際交流センターなどで動画を上映してもらえば活動の目的意識と意欲がさらに高まるだろう。

(2) 利用できるリソースを入手する

Watchの動画を視聴し、モデルスピーチの内容と構成を分析し、発表をイメージさせる。WatchやALTのモデルスピーチ動画などをタブレットに保存し、生徒がいつでも参照できるようにするなど、必要なリソースを選択して自律的な学習ができるよう支援したい。

(3) プロセスを意識して話す

Step 1 Step 2 概念化・言語化の計画

動画撮影時の発表の質を高めるために原稿を書かせて準備することが多いかもしれない。原稿があると原稿を読むだけの発表になってしまうこともあるため、メモを用意して、考えながら話す機会を増やしたいところである。メモは、Step 1の表を活用するとよいだろう。

Step 3 Step 4 調音化の練習・修正

Watchを再度視聴し、音声面（リズム、抑揚、ポーズ、スピード）の特徴を分析させ、自分の発表に生かすように指導する。自分の発表を録画し、それを見て改善点に気づかせることは、自律性を育む上で大事なステップである。数人の生徒に発表してもらい、よい発表のイメージを共有することも効果的である。

Step 5 概念化・言語化・調音化の一連のプロセス

動画撮影の前に、グループを変えて数回発表すれば、回を重ねるごとに流暢に話せるようになったり、失敗を取り戻したりすることができる。聞き手から質問や感想をもらい、英語で応じることも即興性の育成につながる。また、今回のプロセスをふり返り、次回の活動をより洗練されたものにできるようにしたい。

生徒は試行錯誤を重ねて、書いたり話したりするプロセスを実行していく。その過程で教師のサポートは欠かせない。適時に問いかけや助言を与えて生徒が解決策を見出せるように導いたり、協働的な学習を促進して互いに考えを深められるよう支援したりして、生徒を自律的な書き手や話し手に育てていくことが重要である。

NEW CROWNとわたし

“Good night, Peter.”

平成24年度版の2年生はLesson 2と3で地球を題材にしていたので、平成28年の改訂版ではどちらかを『ピーターラビットのおはなし』と差し替えることになった。複数の編集委員でその原稿を準備することになり、私も原稿を作成して提出した。私はマグレガーさんがピーターの失くした上着と靴を案山子（かかし）に着せる場面から最後までを翻案した。そしてお母さんの言葉は “One table-spoonful to be taken at bed-time.” と、具合が悪くなったピーターに薬としてのカモミール茶を飲ませる原文のままとした。しかし編集委員会は私の案を軽く一蹴し、代わりに原文全体を翻案して、最後は “Good night, Peter.” とお母さんが優しくピーターに声掛けすることにして、日々様々な体験をしている日本の中学2年生の心も癒してあげたいと決まった。このお母さんの声掛けは現在まで続いている。良い決定であった。

松沢 伸二
（新潟大学）

Goal Activity [Read]

Goalタスク前後に取り入れたいリーディング指導

鈴木 祐一
（神奈川大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

Goalタスクを目指す前に準備運動をしっかり行おう

Goal Activity [Read]の要は、メインタスクの“Goal” を目指したリーディング指導だ。補助タスクの“Guide” に取り組ませることで、Goalを達成しやすくしている。しかし、いくらGuideがあっても、Goalを自力でできる生徒はなかなか多くないかもしれない。そこで、今回は生徒が自力でGoalを目指せる一つの指導法を提案する。

メインタスクのGoalは、少し困難な（でもがんばれば目指せる）山の登頂を目指すようなものだ。平地のハイキングとは異なり、山頂を目指すには、適切な準備運動が必要である。

今回紹介するGoal Activity [Read]は、2年 Lesson 3 “As We Grow, Dreams Change” である。英文を読む練習はScene 2の本文などで積み重ねているものの、生徒にとっては、1年生の最後の英文（141語）から一気に語数が増えた223語の英文を読むことになる。ここで挫折を感じさせずに英文を読み、メインタスクができたという達成感を味わわせたい。そこで、今回は田村さんのパン店を引き継ぐ前までの生い立ち（前半部）と、パン店での取り組み（後半部）に分けて、まずは準備運動をする方法を紹介する。

準備運動①：背景となる題材を導入する

まず、英文を読み始める前に、挿絵を見せながら、田村さんの生い立ちに関わる発問をしよう。

- What is he holding in his hands?
- Do you think that he likes bread?
- What did he like when he was a child?

この発問の答えは、実はGuide 1「どんなできごとがあったかを考えながら、時を表す表現に下線を引こう。」に関連するため、読む前に問うことで、時を表す表現に着目しやすくなる。また、このGuide 1をGoalのあとに扱えば、再度読み直す中で、時を表す表現を追うと、概要をとらえやすくなることに気づかせることができる。

そして、After he graduated from university, he did not become a baker. He went to Mongolia. Please guess his job.と、次の発問をしてから、前半部を読ませるとよい。モンゴルでの話に少しふれたあと、Guide 2「田村さんがモンゴルで感銘を受けたことは何ですか。」につなげると、前半の英文がぐんと読みやすくなるだろう。

準備運動②：Sceneで扱った表現を再確認する

後半部に入る。まず、Guide 3にあるように、田村さんが日本に帰ってきてからパン店を引き継いで、直面した問題を整理する。そして、彼がどのような解決策を考えたかを生徒に自力で読み取らせたい。

ここでのキーワードは、“leftover（売れ残った商品）”である。実はこの「leftover問題」は、Part 2 Scene 2で取り上げている。そのため、Scene 2の挿絵を見せ、花たちがパン店で働く由香さんから、どんな話を聞いたかふり返ることが効果的だ。例えば、Do you remember that Hana visited a bakery? A bakery shop worker, Yuka, shared her problem at her shop. What was the problem? などと発問しながら、内容をふり返るとよい。

Part 2 Scene 2の内容をふり返るということは、leftoverという単語の意味を忘れてしまっている生徒にとって表現の復習になる。また、後半の英文にある他のキーワード(bakery, bread, waste)も、Sceneのストーリーの中で再確認できる。このような表現の確認をせずに、いきなり読ませてサッパリわからないという生徒が出ないようにしたい。そう、準備運動なしで、ゴールを目指して、怪我をさせてしまってはいけないのだ。

Scene 2のふり返りでは、“How many kinds of bread does Yuka bake at her shop?”などと「何種類のパンを焼いていたか」を確認すると、Readの本文についても、“How many kinds of bread does Mr. Tamura bake?”や“What kind of problem did Mr. Tamura find with his parents’ bakery?”といった自然なつながりを持たせた発問ができる。つまり、Scene 2のふり返りから、「田村さんのパン店の抱える問題は何か捉える」という読む目的を設定して、後半部のリーディングに入れる。これにより、「環境問題に取り組むため、数種類しかパンを焼かない方針にした」という重要ポイントを生徒が自ら読み取るように仕向けるのである。

Goalタスクに取り組んだ後には「整理」運動も

さて、このように準備運動をしながらGuide 1からGuide 3に取り組ませれば、メインタスクのGoalを達成しやすくなっているはずだ。生徒たちがGoalを達成し、山頂に登りきったあと、無事に下山するための「整理」運動をいくつか提案する。必死になって登っている時には気づかなかった文法や表現の働きについて「整理」してあげると、登山中には見えなかった景色がよりはっきり見えるようになる。

整理運動①：ターゲット文法に注目する

本レッスンのターゲット文法である「不定詞」は、読む前に教えるよりも、読んだあとに丁寧に確認すると効果的だ。英語が苦手な生徒にとっては、全体の英文を理解したあとの方が、文法の形式と意味を確認しやすいからである。

英文の中に不定詞がたくさん使われているが、特に読解が難しい5段落めは丁寧な説明が必要だろう。1文めは、... started to make ... to bake ... と2つの不定詞句が並列されていて、「田村さんが始めた取り組み」にふれている。また、2文めもvisitedにlocal restaurants and shopsという長い目的語があり、その後ろに不定詞句で「目的」が示されている。

> Mr. Tamura started to make only a few kinds of bread and to bake less of it. When he had leftovers, he visited local restaurants and shops to sell the last few loaves. That way, he sold every loaf.

整理運動②：どのような表現がSceneからくり返されているか探す

Part 2 Scene 2で使われている表現が、Goal Activity [Read]でもくり返し出てくるためGoal Activity [Read]を読んで、どのような表現が前のSceneからくり返し出てきているかを探す活動を行うとよいだろう。実は、leftovers, bakeryなどの単語に加えて、that wayも副詞的に「そうすれば」という意味でくり返し使われている。例えばScene 2では、My bakery provides twenty kinds of bread. I bake them several times a day. That way, even when customers come late, they have plenty of choices.と、「たくさんの種類のパンを1日に何度も焼く理由」が説明されている。これを踏まえて、Goal Activityでは何を表しているかを確認させる。Sceneで学んだ表現が、新しい文章・文脈でどのように使われているかを生徒に探させる活動は、表現の記憶定着に効果的だ。

整理運動③：単語・チャンクカードを作る

Goalを達成することに精一杯だった生徒たちに、単語・チャンク表現を整理する時間をしっかりと取ってあげたい。単語カードを作って覚える練習をすることは、長期記憶に留めるには有効だということが第二言語習得研究でもわかっている。ただ、どの単語を選ぶかは、丁寧な指導が必要だ。例えば、本文の単語欄に掲載されている太字の英単語は、発信できることを目指す重要表現のため、優先すべきだろう。その際、bake breadやdecide toのように、意味のまとまり（チャンク）で覚えることで発信する時に使いやすくなることも伝える。本レッスンのあとにあるFor Self-study 2「使える単語を増やそう」をあわせて確認するとよい。

整理運動だけでは物足りない時は・・・

言語表現の整理だけでは物足りず、リーディングから発表活動につなげたければ、次のような要約・スピーキング活動ができるだろう。Scene 2では「売れ残り」問題について悩んでいた由香さんに、田村さんの取り組みを要約して伝える目的・場面・状況を設定する。メインタスクのGoalでは、主語が“I”で書かれているが、Mr. Tamura (he)に変えたり、本文を再読しながら要約をまとめさせたりすると、リーディングからライティング・スピーキング活動につなげやすいだろう。

NEW CROWNとわたし

魚も釣り方も

中国春秋時代の哲学者である老子のものと伝えられる言葉に、「授人以魚 不如授人以漁」(Don't give them a fish, teach them how to fish.)というものがあります。魚を与えるか、釣り方を教えるか。悩ましい問題です。でも、私はこの2択に与(くみ)しません。今を生きるために魚も必要ですし、これからの生活のために釣り方を学ぶことも大切です。この両者があってはじめて、生きていけるのです。昨今、学び方が大切とよく言われます。もちろんそうなのですが、中身も大切であるということは言うまでもありません。この両者が調和してこそ、学びが成り立つのです。そんな観点から、新しい *NEW CROWN* を手にとって眺めてみてください。中身と方法の調和を、その中に見て取って頂ければ、これに勝る喜びはありません。

竹内 理
（関西大学）

Take Action! Listen

段階的に聞き取り、考えることを習慣化する

田嶋 美砂子
（茨城大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

はじめに：Take Action! の意味するところ

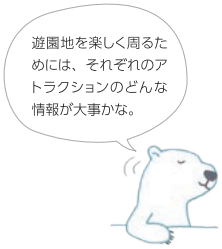
Take Action! Listenは、リスニング指導の核を担う活動です。この活動がTake Action!と名づけられている背景には、音声を聞き取ることだけでなく、聞き取った内容をもとにして生徒一人一人が考え、行動することもリスニング指導に含めたいという意図が存在します。そのため、Take Action! Listenにはリスニングに加え、Thinkというポストリスニングのタスクも設けられています。また、BONUSやSoundsなどのタスクもあります。さらに、巻末資料にはこの活動で使用する音声のスクリプトも掲載されています。

Take Action! Listenに用意されているさまざまな仕掛けは、どのような授業実践を可能にするのでしょうか。ここでは、3年Take Action! Listen 2「遊園地の園内放送」を取り上げ、授業展開の一例を紹介したいと思います。

SETTING：場面設定を確認し、背景的知識を活性化させる

SETTINGには、「夏海はマットと一緒に、クラウンランド遊園地に遊びに来ています」のように、設定が明示的に書かれています。タイトルとSETTINGで、場面が「遊園地」であること、また、これから聞く音声が「園内放送」であることが理解できます。この理解をスタート地点とすることにより、音声を適切に聞き取る姿勢を整えることができるでしょう。

次に、「遊園地の園内放送」は通常、どのような情報を得るときに聞くのかという点について、生徒がこれまでに培ってきた経験や知識を活性化させながら、考える時間を設けます。その際、右のようなシロクマのつぶやきを用いることも、有効です。また、音声を流す前に、Expressionsに掲載されている語句を確認しておくことも、適切に聞き取る一助となります。



1st Listening～3rd Listening：段階的に聞き取る

実際の聞き取りは、1st Listening、2nd Listening、3rd Listeningの3つの段階に分かれています。これらのタスクでは、同じ音声を少なくとも3回聞くことになりますが、聞き取りのポイントがそれぞれ異なります。

1st Listeningの目的は、遊園地のアトラクションについて、メモにまとめることです。メモの項目は、紙面にあらかじめ記載されているので、音声を流す前にそのメモを見て、それぞれのアトラクション（Roller Coaster, Haunted House, Special Show）の情報（待ち時間、閉館時間、開演時間など）を確認させると、聞き取るポイントがより明確になります。

2nd Listeningの目的は、聞き取れなかった部分に意識を向けながら、もう一度音声を聞くことです。それぞれのアトラクションに関する情報はメモの順番通りに流れるので、放送の序盤・中盤・終盤のどこに注目したらよいのかを把握してから、聞くように指示するとよいでしょう。生徒の聞き取り具合が思わしくないときは、ペアやグループを作り、互いに助け合いながら、聞く時間を設けてもよいかもしれません。また、メモの答え合わせは、1st Listeningと2nd Listeningの後に行うと、英語が苦手な生徒でも、自信を持って自分の解答を述べることができると思います。

3rd Listeningでは、巻末資料のAudio Scriptsを活用します。ここではスクリプトの有効な使用方法が3つ紹介されていますが、授業では1つめの「スクリプトを見ながら、音声を聞いてみる」ことに焦点を置きます。音声を聞いた後は、1st Listeningで作成したメモの箇所がスクリプトのどこにあるのかを探す時間を設けます。これにより、解答（特に聞き取れなかった部分）を視覚的に確認することが可能になります。なお、スクリプト使用方法の2つめや3つめ（「スクリプトを声に出して読んでみる」「流れてくる音声と同時に言ってみる」など）は、自宅学習として取り組むと、リスニング力をさらに伸長できることを生徒に伝えるとよいでしょう。

Think：考えることを習慣化する

Thinkでは、1st Listeningから3rd Listeningまで複数回にわたり聞いた園内放送をもとに、「自分なら、最初にどのアトラクションに行くか」「それはなぜか」という問いについて考えます。ここで重要となるのが、聞き取った情報を活かすための思考力です。

「遊園地の園内放送」の場合、具体的には、これまでの聞き取りに関するタスクで、次の点をメモに記しています。

- Roller Coaster　：1時間待ち、整理券が必要。
- Haunted House：午後3時～4時まで閉館、お化けが入れ替わる。
- Special Show　：午後2時開演、スケートショー、風船は入場ゲートで午後1時から入手可能。

こうした情報をもとに、自分の考えをまとめますが、その後はペアやグループで意見を出し合ったり、クラスで発表したりする機会を設けるとよいでしょう。他者の意見を聞くことにより、思考がさらに深まるからです。例えば「最初にRoller Coasterの整理券をもらいに行く。待ち時間に別のアトラクションを楽しめるから。」と考えていた生徒も、「最初にSpecial Showに行く。早めに行ってよい場所を確保すれば、間近でスケートショーを楽しむことができるから。」というクラスメートの意見に触発され、考えを変えるかもしれません。こうしたタスクに常に触れることにより、リスニング活動を単なる聞き取りの時間で終わらせるのではなく、自分のこととしてその内容を考える習慣も身につける機会となります。

BONUSとSounds

BONUS 学習内容を応用する

BONUSでは、Take Action! Listenとパラレルな音声を聞くことにより、リスニング力のさらなる伸長を目指します。「遊園地の園内放送」の場合、具体的には、クラウンランド遊園地の案内と類似した内容のスマイリーランド遊園地の放送を聞きます。生徒には、ここで学んだ聞き取り方（アトラクションに関する要点をまとめる方法）を応用するとよいことを伝えると、たとえ初めて聞く音声でも、比較的容易に取り組むことができると思います。なお、BONUSでも、1st Listeningから3rd Listeningまでの段階を踏むことが可能ですが（スクリプトは指導書に掲載されています）、どの部分に力を注ぐのかは、教室の様子に応じて決めるとよいでしょう。

Sounds 音の細部を意識する

最後は、音そのものに関係するタスクです。「遊園地の園内放送」では、ディクテーションを扱います。まずは、これから聞く内容がクラウンランド遊園地のHaunted Houseで流れる放送であることを確認します。次に、空所に単語を書き入れるように指示し、音声を流しますが、書く時間を考慮し、一文ごとに音声を止めるとよいでしょう。実生活ではあり得ないことですが、ここでは、重要な情報となる数字（in about fifteen ...）や動作（cannot take your ..., get away など）に意識を向け、それらを正確に書き取るという点を、英語学習の一環として重視します。音声を流す回数は、教室の様子を見ながら決めますが、少なくとも2回は聞かせたいところです。もし時間に余裕があれば、音読のポイントを確認し、声に出して読む練習をしてもよいと思います。音のつながりなどを理解し、実際に読めるようになることが今後のリスニング力の向上につながるからです。

このように、*07NC*のTake Action! Listenは、これまでの*NEW CROWN*のよいところをさらに進化／深化させたタスクで構成されています。こうしたタスクへの取り組みを積み重ねることにより、生徒がリスニング力を向上させるだけではなく、身近な事柄から社会的な話題まで、物事を深く考える契機にもなることを願っています。

NEW CROWNとわたし

I am “Nakanishi Koichi.”

「先生、私 “Hana Tanaka” なん？ 私の名前『田中花』（仮名）やねんけど・・・。」教師になって間もない頃、ある生徒からもらった質問です。当時は「名姓」の所謂（いわゆる）「英語式」の順が多く使われていたように思います。その時は「 “Tanaka Hana” でいいはずやね。」と煮え切らないような応え方しかできませんでした。その後 *NEW CROWN* との出会いが私をスッキリさせてくれたのを覚えています。*NEW CROWN* には、題材はもとより、言語材料にも様々な「メッセージ」が散りばめられています。教材研究をする度に考えさせられることも多く、生徒たちと一緒に成長させてもらったことに感謝しています。そう言えばある生徒にはこんなことも聞かれました。「先生、なんで（何のために）英語を勉強するの？」生徒にとっても教師にとっても、旧（ふる）くて新しい永遠の「問い」かもしれません。さてどう応えましょう。

中西 浩一
（平安女学院大学）

Take Action! Talk

単元全体を見通した Take Action! Talkの指導

鈴木 悟
（東京都立両国高等学校）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

はじめに

現在、高校生を指導しているが、最近は社会の要請や時代の変化に即し、「総合的な探究の時間」がより活発に展開されている。学校の外で評価を受ける機会も増加し、ビジネスアイデアやSDGsに関するコンテストが行われ、高校生向けのアントレプレナーシップ教育プログラムも官民で提供されている。社会と学校が一層連携し、生徒たちに実社会で必要な「課題解決能力」などのスキルや資質を養うことが促されていると言える。

そのような時代においては、英語の授業を通じて、生徒に「自己PDCAサイクル」を自在に働かせる力、つまり「学びに向かう力」や「学習方略」を身につけさせることが重要だ。これを実現するためには、「メタ認知」や「自己調整」などの要素が欠かせない。

そのために、*NEW CROWN*では、単元全体を大きく2つに分けて進めることが効果的だ。一方は、基本的なスキルや知識を伝える場面（Lesson）での指導、もう一方は生徒が主体的に活動に取り組む場面（Take Action! TalkやProject）での指導である。

単元計画を策定する際に、前者の場面では、Take Action! Talkの活動に向けた基礎を築くために、生徒に対話文などを理解させ、音読練習を十分に行わせる。

後者の場面では、ペアで協力して対話文を理解し、既習の知識を活かしながらオリジナルスキットを作成する。その際に、二次元コードや辞書を活用し、ペアで協働して計画的に練習させ、クラスの前で発表させる。最後に、発表までの過程の「ふり返り」をして単元を終える。

こうして「ふり返り」での自己の課題や改善点を次の単元に活かすことで、言語スキルの向上だけでなく、コミュニケーションや問題解決能力を発展させることができる。

1年 Take Action! Talk 2に向けたアプローチの例

Lesson 4 の指導例

教科書本文を理解して、音読できるようになったら、「Read and Look up」、「教師との対話練習」、「生徒同士の役割練習」、「プラスワンダイアローグ」（生徒に対話の流れに即したオリジナルの英文を付け加えさせる）などの手順で、対話を広げ、継続する力を身につけていく。一連の過程は、Take Action! Talk 2のスキット発表の原稿作成の一助となり、また、発表に向けた練習方法を体感することにもなる。

Take Action! Listen 1の指導例

Lesson 4に続くTake Action! Listen 1の3rd Listeningでは、巻末資料のAudio Scripts（スクリプト）を見ながら音声を確認する。ここではスクリプトを活用する3つのステップが示されているが、Read Aloud & Checkでは、生徒が主体的に学ぶための練習として扱うことができる。生徒は最初にスクリプトを読み、発音できなかった箇所を把握し、その後、二次元コードの音声を聞きながら練習する。再び音声を聞かせて、自分の読み方との違いに気づかせて練習する。このように普段の音読練習でも、教師主導の“Repeat after me.”でのくり返しから脱却したい。Take Action! Listenのページ下のSoundsでは、単語の発音に焦点を当て、強く発音する部分に印をつける活動を行う。ここでも、音声を先に聞かせるのではなく、既習の知識を活かして、個人またはペアで印をつける部分を予測させてから聞かせるとより効果的だ。自らの理解を深めて練習することで、次のTake Action! Talk 2でも、日本語（サンドイッチ）と英語（sandwich）の音声の違いを意識しながら発表練習をするようになる。

補足すると、一連の言語活動の中で、3rd Listeningでスクリプトを音読することは、次のTake Action! Talk 2でオリジナルスキットを作成する際のヒントとなる。例えば、スクリプトの“First, we recommend chicken *ramen* from Tao.”という英文から、生徒は、“What do you recommend?” “I recommend ....”といったやり取りを作ることができる。また、“You can choose one of three toppings ....”という英文を参考にしてtoppingsの内容を変

更したり、“Today you get a drink for free.” “You get a free dessert with it.”などと店員の最後の台詞を選択して、それに応答する様々な相づちを考えるなど、会話を広げることができる。

Take Action! Talk 2の導入～スキット作成～発表

単元の中で生徒が主体的に活動する場面として、Take Action! Talk 2では、「スキットを作って発表すること」を目標に設定する。1年にある4つのTalk（道案内／フードコートでの注文／体調不良／手伝いのお願い）を学期ごとに取り上げ、スキット大会を開催するとよい。単元の中の学びを活かすことで、原稿を作らせずに短時間でも、個性ある多様な発表が可能である。

しかし、「注文」のような特定の場面では、多様な対話文が生まれにくく、内容面でオリジナリティに欠けることがある。反対に、スキット作成時に独創性を追求し過ぎると、生徒が「言いたいこと」（未習事項を含む）と「言えること」の差が大きくなり、辞書に頼って聞き手の共感を得られない発表になることもあるだろう。

前述の指導例に加えて、小学校で学習した「注文」の場面に関連した馴染みある表現（既習の知識）や、Lesson 4の旅先での食事に関する表現（新たな学び）を、スキットの内容に加えさせてもよい。食べ物の注文時に、旅行先での思い出を語るなど、無理なく表現豊かな発表をすることができる。

Take Action! Talk 2の「ふり返り」

前述の指導例と発表の実践を通じて、言語の実用性を実感させ、言語スキルの向上だけでなく、実社会で不可欠なスキル（「自己PDCAサイクル」をまわす力）を養うことができる。そして、この過程で最も欠かせないのは、発表時の自己の「ふり返り」である。スキット発表の前に、「評価用紙」と以下の「ふり返り」を配布し説明を行う。

① 前回の発表の課題から改善した点
② 他の発表を見て参考になった点
③ 今回の発表で（前回と比較して）成長できた点
④ 次回の発表に向けての課題・改善点
⑤ その他コメント・感想

生徒たちは自らの発表や他のグループの発表をふり返り、何がうまくいったか、どの部分を改善すべきかを自己評価する。さらに、後日、生徒の「ふり返り」を抜粋して紹介したり、他のクラスの発表を録画したものを、学年全体でロールモデルとして共有したりして、再度フィードバックを行う。これにより、「自己PDCAサイクル」の一環として、他者との様々な違いを意識して、自らの成長できた点や課題を明確にし、次の発表に向けた目標を設定する力を養うことができる。

このような発表活動とふり返りを組み合わせることで、生徒たちが単元全体を通じて主体的に学び、「学習方略」の改善と修正を行い、「メタ認知」や「自己調整力」を伸ばしていくことが期待できる。

おわりに

最近では、多くの学校で、ProjectやTake Action! Talkのスキット活動を含むアウトプットの言語活動が増えてきた。その中で、「発表」と「ふり返り」を経て、次の「『類似した』発表」に向かうというサイクルがより意識されるようになった。この一連のサイクルでは、単元の始めから発表までの過程をふり返り、次の発表に向けて、個々の課題を改善して「再挑戦」していくことが重要だ。最終的には、生徒がこのサイクルを通じて「成功体験」を積み重ね、「自己肯定感」を高めることで、「自己PDCAサイクル」を内在化することが期待される。これが生徒の主体的な学びを引き出す一助となる。

この一貫性のある学習サイクルは、生徒たちが課題に粘り強く向き合い、英語力を向上させる鍵となり、さらに、実社会で生涯にわたり必要な資質や能力を育成していくことにつながる。これらを念頭に置いて、今後も授業改善やよりよい単元計画の策定に努め、生徒たちが意欲的に学び続けられる環境づくりに貢献していきたい。

NEW CROWNとわたし

今日まで、そして明日からも ～クラウンに育てられた半生～

Tom, Susie, Blakie が登場する *Junior Crown* で英語を学び、英語科教員となった年に *NEW CROWN* が発刊され、平成5年度版からは著者の一人に加えていただいた。ことばの教育の本質を熱く訴える森住衛先生、鋭い眼光で教科書の何たるかを熱く語った伝説の編集長、研究会に行けば必ずいる、おそらく日本で最も多くの授業を参観したであろう実直な営業担当らの姿は強烈な印象として残っている。以後、「人間教育」「知的好奇心」「多言語、多文化主義」「アイデンティティ」など、学ばせてもらったことは枚挙にいとまがない。著名な大学の先生も私のような一介の中学校教員も、分け隔てなく教科書づくりに携われる体制も素晴らしい。今日まで、そして明日からも、真に国際社会の一員たるにふさわしい人格を育てるのは、やはり *NEW CROWN* でしょ！

重松 靖
（国分寺市立第一中学校）

Take Action! Read

学びに磨きをかける絶好の機会

金丸 紋子
（カリタス女子中学高等学校）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

オーセンティックなテキストで「読む」楽しさを体験しよう!

2年 Take Action! Read 1では、博物館のアクティビティの案内というオーセンティックなテキストから、必要な情報を読み取り、Readに示された4人の人物の興味・関心等を考慮しながら、博物館での過ごし方やプランを練る練習をする。読解力だけでなく、思考力・判断力・表現力も合わせて磨いていくことができる。「目的をもって読む」「情報を整理しながら読む」楽しさを体験させたい。

Step 1：Warm-up（3分）

場面設定の確認とその状況におけるスキーマの活性化をねらい、教科書を開く前に、リラックスした雰囲気で口頭でQ&Aを行う。“Have you been to museums lately?” “Which museum did you go to?” “What do we usually see first when we enter the museum building?”などの質問をすることで、生徒が自由に経験や想像をもとに応答し、以降の活動で情報を読み取るための準備をすることができる。

Step 2：どんな情報が書かれているか想像してみよう（3分）

アクティビティの案内の大枠を捉える。教科書をまだ閉じた状態で、これから読む案内は“Activities” “Attention” “Map”の3部構成になっていることを生徒に伝える（板書するとよい）。そして、それぞれにどのような情報が載っているか、生徒にペアで考えさせ、予想をクラスで共有する。Step 1と同様に、状況に応じて生徒が持っている知識を活用させて主体的に取り組ませたい。

Step 3：目的を把握しよう（2分）

Readの指示を読み、取り組む課題（読解の目的）を理解する。何のために読むのか、その目的を明確にして必要な情報を読み取るようにすることで、読むという活動が生徒にとって意味のあるものになるように仕掛けるためである。

Step 4：単語や表現に慣れ親しもう（5分）

アクティビティの案内の詳細を読む。書かれている情報と脚注の単語をクラスで音読する。ここでの活動は「読むこと」がメインではあるが、Step 5以降のペアワークなどで情報交換をする際に正しく発音できるように、音読の活動を通して音に親しむ。

Step 5：情報を読み取ろう（10分）

“Activities”に書かれた情報を“Map”と照らし合わせながら読む。アクティビティと時間、場所の把握を主に意識させたい。また、わからない単語がある場合、脚注を参考にするように声かけをする。生徒はペアで、一人がアクティビティと時間、場所を伝え、もう一人が“Map”でその場所を指す。これを交互に行う。“Activities”に書かれた時間や場所を把握し終えたところで、“Attention”を読む。

Step 6：おすすめのアクティビティを選ぼう（20分）

Readの指示を読み、4人の人物のニーズや興味・関心にあったアクティビティをペアで相談して決める。一日もしくは半日、博物館に滞在すると仮定して、おすすめのプランを組む。その後、クラスで共有する。

Step 7：自分の取り組みをふり返ろう（3分）

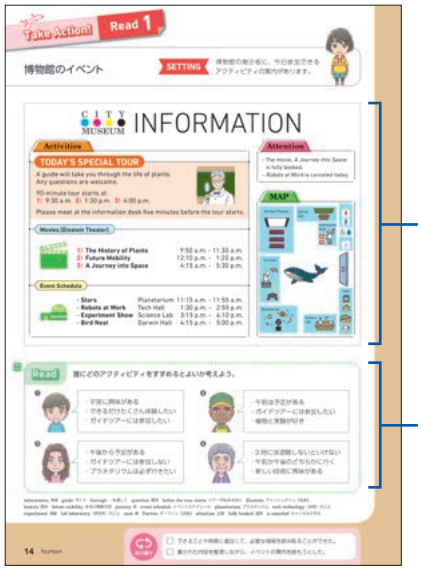
ページ下のふり返りの項目を読み、自己評価を行う。

Bonus Step

時間に余裕がある場合は、Bonus Stepを追加することもできる。

①ペアでシンプルな「やり取り」の活動にチャレンジする。一人が4人の人物の役になり、もう一人がおすすめのアクティビティやプランを紹介する対話を作ったり、実際に演じて発表したりする。

②生徒がこの博物館に行くと仮定して、最も興味があるアクティビティを1～2つ選び、その理由をペアやグループ、もしくはクラスで共有する。



2年 Take Action! Read 1

題材紹介 ②

Goal ActivityやReading Lessonの説明文や物語では、生徒がことばや社会について考え、異文化や国際理解を深められるような題材を選定しています。その一部を紹介します。

1年 Lesson 7

Athletes with Spirit

これまでにも取り上げてきた車いすバスケットボールに加えて、近年注目を集めるスポーツを取り上げ、アスリートたちの想いに迫る。敵味方なくたたえあう精神が注目を集めたスケートボード、常にチームメイトを支える様子が記憶に新しいカーリングなど、それぞれのスポーツが大事にするものからの学びは多い。目標設定の大切さを説く鳥海連志選手のメッセージと併せて、1年後半のこの時期だからこそのふり返りや将来展望につなげたい。

（**橋本 健一**　大阪教育大学）

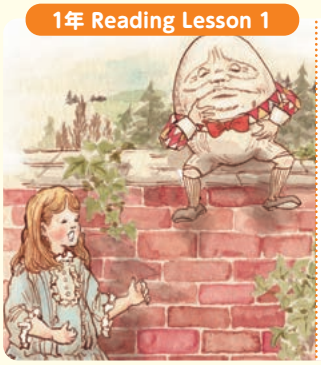
My Dream

“My Dream”は将来の夢や職業について考えさせる題材である。しかし、中学生に「将来やりたい仕事は?」と尋ねても、社会を広く知らない彼らが思いつく職種は限定されている。むしろ、この単元を、世の中には様々な職業があることを知る機会にしてはどうだろうか。また、Goal Activityでは、一つのアイデアによってその仕事が輝く例も紹介されている。この題材を通して、社会には様々な職業があり、多くの人がそこでがんばっていることを知ってもらいたい。

（**佐々木 顕彦**　武庫川女子大学）

2年 Lesson 3

1年 Reading Lesson 1



2年 Reading Lesson 1

Alice and Humpty Dumpty / The Tale of Peter Rabbit

British children’s literature is characterized by magic and enchanted worlds. First year students can enjoy the enchanted world of Alice and Humpty Dumpty. Second year students, more familiar with the stereotypical landscape of the British countryside, can easily visualize The Tale of Peter Rabbit. Both these stories provide students with a chance to experience the magic of reading.

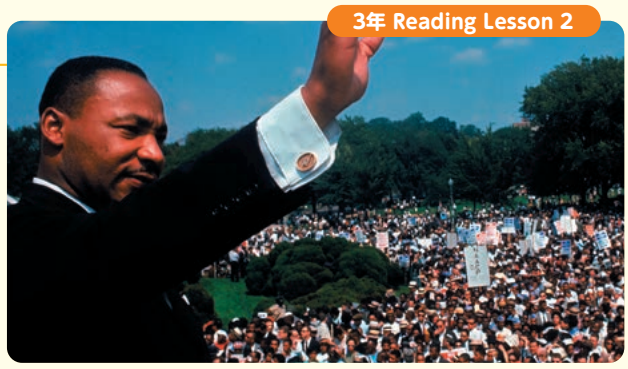
（**Robin Sakamoto**　杏林大学）

I Have a Dream

*NEW CROWN*の定評ある題材“I Have a Dream”が Reading Lessonとしてさらにアップグレードして登場する。正義と公正という人間として当然の権利を獲得するためにMartin Luther King, Jr.らが闘った、その歴史の詳細が Unfair Laws, Rosa Parks, Bus Boycott, I Have a Dreamという4つのキーワードでテンポよく解き明かされる。社会の公平性を現代的な視点で考える Lesson 6 “Being Fair”の理解を深めるのにも格好の題材となるだろう。

（**横川 博一**　神戸大学）

3年 Reading Lesson 2



Project

「言語の働き」と「ICT機器」で深化するProjectの言語活動

奥住 桂
（埼玉大学）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

「言語の働き」がProjectをおもしろくする

*NEW CROWN*には、各Lessonで学習した表現を用いて発展的な言語活動に取り組むGoal Activityのほかに、既習の言語材料を活用して領域統合的な活動に取り組むProjectのページが、各学年に3回ずつ設定されている。このProjectは、直近に学習した表現だけでなく、これまでに学習した知識や技能を総動員して取り組む「思考・判断・表現」の指導と評価にぴったりなページになっている。

とはいえ、こういったページはこれまでにも存在したし、教科書を使用しなくても同様の活動を授業に取り入れてきた先生がたは多いだろう。そこで本稿では、この*07NC*のProjectがどのような点で新しくなったのか、そして先生がたが教室でこれらのページを扱う上でどんな工夫ができるのかについて考えてみる。キーワードは、「言語の働き」と「ICT機器」である。

現行の学習指導要領の「2 内容」の中の「(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項」には、言語活動を行う際には「言語の使用場面」だけでなく「言語の働き」を取り上げるようにする、とある。具体的には「礼を言う」「苦情を言う」といった「気持ちを伝える」働きや、「申し出る」「反対する」といった「考えや意図を伝える」働きなどが列挙されている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）外国語「イ　言語の働きの例」

(ア) **コミュニケーションを円滑にする**	・話し掛ける ・聞き直す	・相づちを打つ ・繰り返す　など
(イ) **気持ちを伝える**	・礼を言う ・褒める ・歓迎する　など	・苦情を言う ・謝る
(ウ) **事実・情報を伝える**	・説明する ・発表する	・報告する ・描写する　など
(エ) **考えや意図を伝える**	・申し出る ・意見を言う ・反対する ・断る	・約束する ・賛成する ・承諾する ・仮定する　など
(オ) **相手の行動を促す**	・質問する ・招待する	・依頼する ・命令する　など

こういった「言語の働き」は、当然ながら相手がいるコミュニケーションの中で機能するものだ。例えば「反対する」という行為をするためには、誰かが主張している意見などに反対意見を述べるということなので、そのためには相手が何を言っているのかを理解し、その反論として適切な内容を考え、相手に伝わるような表現や言い方を考える、といったコミュニケーションの相手を意識した「思考・判断・表現」が求められる。

*07NC*のProjectを1つ紹介しよう。2年Project 2「人気のあるもの調査」は、「海外から日本に修学旅行に来る学校の生徒のために、日本のおすすめの食べ物をランキングにして紹介する」という設定になっている。この活動では、アンケートを取るために「質問する」、結果をまとめて「報告する」、グラフなどを「描写する」といったさまざまな「言語の働き」を駆使して活動に取り組む必要がある。

このように、目的がしっかりしている言語活動では、複数の「言語の働き」が自然と引き出される。例えば誰かに何かを「報告する」際には、“I'm going to talk about ....” と「話を切り出す」ための未来を表す表現や、“Look at this chart.” と「相手の行動を促す」ための命令文など、複数の文法事項や「言語の働き」を組み合わせて表現することが求められる。このように複数の「言語の働き」を織り込んだ言語活動にすることで、これまで学習してきた内容を目的や場面別に再整理する機会にもなるだろう。

*07NC*のProjectでは、こういった「言語の働き」が生きる活動がたくさん設定されている。1年Project 2「理想のロボット選手権」は、当然ロボットの特徴や機能を「描写する」ことが中心になるが、そこに「提案する」という要素が加わることで、生徒の言語使用がより複合的で多彩なものになるように工夫されている。

一方で、2年Project 1「スピーチ『My Dream』」のように、シンプルな活動もある。こういったスピーチは定番の活動だが、同様の活動を小学校でも経験している可能性もある。そこで、この活動をより魅力的にアレンジするために、先生がたで別の「言語の働き」をトッピングしてみてはどうだろうか。

例えば、この「My Dream」というスピーチに「説得する」という働きを加えたらどうなるだろうか。誰かを説得するために自分の夢を語るというと、「クラウドファンディングの提案」などの場面が思い浮かぶ。それぞれの提案を聞いた人が、どの提案に出資するかを選ぶといった活動にすると、聞き手にもより緊張感が出るし、話し手も相手に納得してもらえるように「何を」「どう」伝えるかという工夫をするようになる。これこそ「思考・判断・表現」のねらうところだろう。

「言語の働き」を強化するICT機器の働き

新しい*NEW CROWN*のProjectのもう一つの特徴は、ICT機器の活用を促す活動デザインになっていることだ。例えば、3年Project 2「ラジオの30秒CM」では「CMを録音しよう」というステップが示されているが、これはタブレット端末等が配備された現代の教室だからこそ提案できる活動だと言える。

授業におけるICT活用というと、最新のアプリやネットサービスなどを最大限に活用した華々しい活動事例を目にすることもあるが、実は一番役立つのはタブレット端末等に最初からついている基本的な機能である。例えば、「録音」「動画撮影」「写真撮影」「お絵かき」「タイマー」などの機能は、どんな端末にも標準的に備わっていると思う。この「地味な機能」をうまく組み合わせることで、Projectの活動はより深い思考を学習者に促すようになる。

先述の「ラジオの30秒CM」で言えば、自分の声を録音して聞くだけで、生徒は「これじゃ駄目だ」と何度も録音し直すようになる。30秒という時間制限があるので30秒に収まらなければもちろん、聞き取りにくいところがあったり、もっと強調して伝えたいことがあったりすると、生徒は「もう一回！」と挑戦を続ける。このようにICT機器の「地味な機能」のよいところは、生徒が自分のパフォーマンスを客観的に見る（聞く）ことができる点にあるが、それによって「伝える」「宣伝する」といった「言語の働き」が可視化され、生徒たちがその働きを体感できるという点も大きいだろう。

2年Project 3「好きなもの×観光マップ」や、3年Project 1「旅行プランの提案」などの発表型の言語活動では、画像を貼りつけて簡単に綺麗なデザインの制作物を作れるのも魅力的だ。こういった制作系の活動では、これまでだったら生徒自ら絵を描いたりしていたが、そこに時間がかかりすぎるという難点もあった。ICT機器の活用により、短時間で、簡単に、しかもよりリアルな制作物が作れるようになることで、生徒も教師も英語学習のほうに時間とエネルギーを注げるようになるはずだ。

また、コミュニケーションの手段として、言語以外の視覚的要素も大きな役割を果たす。ポスターやちらしを作成する上で、このような「見せ方」を考えさせることで、文字として載せる英文はどんな内容、量、表現であるべきかを主体的に考えるはずである。これも、ICT機器が「言語の働き」を強化する一例といえる。

新しくなった*NEW CROWN*のProjectを紹介してきたが、紙面の通りそのままやってみてもよいし、「言語の働き」や「ICT機器」を「ちょい足し」してみるのもおもしろいだろう。いずれにしても、目の前の生徒たちがより主体的に英語を使用する機会になるように、このProjectを最大限に活用していただければと思う。そして、具体的な活用事例や「ちょい足し」のアイデア等を、今後先生がたと共有していけたら、さらに楽しい英語授業が全国に広がっていくのではないかと期待している。

NEW CROWNとわたし

Writing about Science

Writing about STEM topics (science, technology, engineering, and mathematics) is a special skill – especially for writers not from STEM disciplines. All three books have at least one STEM topic, and each was a challenge to write.

We needed topics that connected with the lives of our students and that interested them. We needed topics with feelings and characters our students could relate to. And we needed to explain the matter clearly and accurately for our readers. Bringing all these together while writing about emergency planning, water recovery, and design and technology was a challenge. Getting it right required many discussions and revisions and finally checking with expert articles in the field.

In the future, I hope we can find and include more STEM topics that engage students and connect with their lives and interests. If you know of any, please contact us. We are always open to suggestions.

Thomas Hardy
（元 慶應義塾大学）

ディスカッション

教科書を活用した「話し合い」の指導

谷口 友隆
（相模原市立大野南中学校）

内容解説資料は
こちらから
ご覧いただけます

はじめに

これをお読みいただいている先生がたの生徒は、英語による話し合いを活発に行えるだろうか。「現状、十分に話し合いができない」とお答えになるならば、どう指導すればできるようになるかをともに考えたい。それを考えることこそが教材研究であり、授業改善である。

令和5年度の全国学力・学習状況調査の「話すこと」の結果を見ると、この「話し合い」をどう指導していくかということは、現在の中学校における英語教育の大きな課題であることは間違いない。そして生徒に実際に話し合うことをさせずに、生徒の「話し合い」の力を育むことはできないことも自明の理である。本稿では、話し合いをまだ十分にはできない生徒を対象に、教科書を用いてより活発に話し合いができることを目標に指導した実践例を紹介する。

「話し合い」を目標にした授業実践

2年 Take Action! Talk 2では、山へ遊びに行ったら何をしたいか登場人物が話し合っている会話を参考に、生徒も同じテーマで意見を述べ合う。

(1) 目的・場面・状況を提示する

「学年の最後に山へクラス旅行をします。みんなが楽しめる過ごし方を考えよう」と示し、本文の内容と同じ状況を教室に作り出す。教科書にあるようなカヌーやジップラインができる場所が身近にあればそれを使うことが望ましいが、特になければ違う場所でも構わない。そこでできるアクティビティーの写真を提示し、内容を想像しやすくすると同時に、canoeやzip-liningなどの単語のinputも行う。

(2) 必要な表現をinputする

まずは生徒に山で何をしたいか自由に提案させる。その際に、生徒の意見や発言を正しい表現で言い直し、必要な語彙・表現（Expressionsにあるような表現）をinputする。具体的には、次のようにExpressionsにある表現を使いながら進めていく。

教師	What do you want to do if you visit *** mountain?
生徒A	ジップラインやりたい。
教師	In English?
生徒A	I want to try zip-lining.
教師	*That's a good idea!* How about you, B-san?
生徒B	Canoe! Canoeing sounds fun.
教師	*I agree with you!* You should say *"How about canoeing?"*

※斜体はExpressionsの語句

(3) 意見の理由を言えるようにする

生徒から案が出たら、次のようにそれぞれの長所や問題点を問いかける。これは、提案に対して生徒が賛成・反対の理由を言えるようにするためである。この際、生徒が表現をinputできるよう口頭練習を交えながら進める。また、必要に応じて、話し合いの時に活用できるように、キーワードになる語句や文を板書しておくとよい。

教師	These activities have some good points and some bad points. What are they? I think zip-lining is fun, but does everyone agree with me?
生徒	No. It's scary.
教師	Oh, I see. And it costs 3,000 yen. Is it a good price for you?
生徒	No. It's expensive.
教師	Zip-lining is fun, but some students think it's scary or expensive.

(4) 話し合いのモデルをつくる

次のように、教師による提案のモデルを提示する。ここでは、生徒が反論しやすいような文にしておき、反論の仕方を練習させる。

I think we should choose bungee jumping because it is fun.
I think that everyone can enjoy it. Do you agree with me?

生徒から「危ない」「怖いからやりたくない」「みんなが楽しめない」などの批判が出る。ここで教師が「全否定されると傷つくので、*I see your point.*とか*That's not bad.*とかを使って、まず受け入れてから反論してごらん。」と言い、表現をいくつか板書して使うようにうながす。最終的に、次のような発言ができるように導く。

- That's a good idea, but not everyone can enjoy it because it is dangerous.
- I see your point, but I don't like it because it is scary.

(5) 表現の確認と教科書の音読

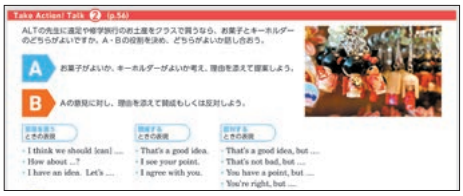
ここで教科書の音声を聞かせる。ほとんどの単語は頭に入っているので生徒は楽に理解できる。さらに教科書を開いて、文字で表現を確認し、話し合いの活性化に向けてSkitの音読練習を行う。

(6) ペアによる話し合い

隣のペアと「山へ遊びに行くなら何をするか」というテーマで話し合いを行わせる。「クラス全体で」としないのは、ペアによって結論が変わる方が現実的でおもしろいからである。そのため1つのペアだけでなく、相手を変えて数回行うとよい。教師は、生徒の発話をモニターし、ほかの生徒が参考にすべきよい点やアドバイスをその都度全体にフィードバックすると話し合いの質が高まる。

(7) ロールプレイシートの活用

巻末資料「Role-play Sheet」を使って、違った目的・場面・状況で話し合いをさせる。ここまでの指導があるので、ロールプレイシートの課題である「お菓子」と「キーホルダー」をお土産とするときの利点と問題点を事前にヒントとして挙げておけば、生徒は英語である程度話し合えるはずである。なお、ロールプレイシートをALTやJETと一対一で行う実技テストで使うこともできる。



生徒を「話し合い」へと導く3つの柱

ひとまとめに「話し合う」といっても、「意見を言う」「理由や根拠を述べる」「相手の意見を理解した上で賛成か反対かを述べる」など、押さえるべきことは多い。それらをひとつひとつ習得させていく過程はお読みいただいた通りであるが、これとは別にこの指導実践の柱としたことが3つある。

1つめはMotivatingである。生徒に「意見を言いたい」と思わせるように、テーマ設定や進め方を工夫することが大切である。現実的な場面を設定したり、導入で写真を使ったりすることで、話し合いを生徒にとってリアルなものにするとともに、生徒の動機づけを図る。また、先に示したように、あえて反論しやすい意見を提示することで、生徒の「発言したい」という気持ちを高められるように工夫する。また、ゆっくりスモールステップで進めていくことで、生徒に「できそうだ」と自信を持たせられるように意識したい。

2つめはPlanning Timeである。活動に入る前も、活動の間も、意見をまとめたり整理したりするために、生徒に考える時間をじっくり与えるようにする。例えば、生徒とのやり取りを導入から時間をかけて行うことで、「自分だったらこれを選ぶ」「自分だったらこう言う」と生徒が自分で考えるようになる。活動の間にフィードバックも行い、次のペアとの話し合いに移る前に自分の発話をふり返り、修正したり整理したりする時間を与えられるとよい。

そして、3つめはTask Repetition、つまり、タスクを一度で終わらせるのではなく、何度もくり返し行う中で生徒が徐々に話し合いができるように考えて指導していくことである。本時の指導でも、まずは先生と学級全体で話し合い、次に生徒同士でペアを変えながら習熟していくことを目指した。次の時間以降も、ペアや課題を変えながら帯活動としてくり返すことで、さらなる習熟が期待できる。

このように、話し合いを行う際は、Motivating、Planning Time、Task Repetitionを意識して授業を組み立てると効果的である。

最後に、冒頭の質問の私なりの答えは「生徒が学んだことや練習したことを使う機会を提供することが、英語で活発に話し合いができる生徒を育成する」ということである。普段の授業が、教科書の音読や内容理解だけで終わっていないだろうか。そのあとに必ず、英語を使う機会を日々の授業に設けたい。そして、先生がたのさらなる創意工夫で、生徒が活発に話し合いができるよう導いていただきたい。この実践例がそのたたき台となれば、この上ない喜びである。

NEW CROWNとわたし

NEW CROWN Topics

A lot of care and hard work go into every edition of *NEW CROWN*. The editors, educators, illustrators, and everyone involved strive to bring English-language students and teachers the best materials for learning.

We choose topics that are not only important, but also relevant to the lives of the students. This helps to make them more aware of the world and also helps to demonstrate language's usefulness. We always add detailed information to the content of the readings and listenings to make each topic interesting to learn about. Even topics that continue from past editions are researched again to ensure that they are accurate and up-to-date.

We hope you enjoy using the latest edition of *NEW CROWN* as much as we enjoyed making it!

Matthew Miller
（東京外国語大学）

学びの個別最適化

英語授業における学習の個別化とプロジェクト化

山本 崇雄
（横浜創英中学・高等学校）

画一的・一斉型授業の限界

日本の学校教育は、明治維新以来約150年間、画一的・一斉型授業を中心として教師主導の授業スタイルを続け、カリキュラムと指導方法に焦点を当ててきました。しかし、この方法だと生徒一人ひとりの学力や学び方の特性に合わせることができません。中学１年生の１学期の授業を見ても、アルファベットが分からない生徒もいれば、帰国子女のように流暢な英語を話す生徒もいます。また、学び方についても、文字を読んで理解する生徒や音で聞いて理解する生徒、コミュニケーションが得意な生徒や苦手な生徒、ディスレクシアやADHDのような特性を持った生徒などさまざまです。このように多様な生徒たちに対して、画一的・一斉型授業を行うには、教材準備や指導法の工夫に必要以上に時間がかかるため、教員の働く環境を悪くする一因にもなっています。

「学びの個別化」「学びのプロジェクト化」

これからの授業を考える上で、多様な学び方を広げていく視点が必要です。熊本大学の苫野一徳准教授はご自身の著書や講演で、これからの授業では「学びの個別化」「学びの協働化」「学びのプロジェクト化」が重要だと主張しています。

学力も興味・関心も異なっている生徒が効率的に学ぶには、「学びの個別化」が重要です。GIGAスクール構想で、すべての小・中学校の児童・生徒に、１人１台端末が配布され、「個別最適化」ということが盛んに叫ばれるようになりました。一人ひとりに合わせた「学びの個別化」に関しては注目を集めるようになってきましたが、個別化しただけでは、「放任」や「学習の孤立化」が起きる恐れがあります。そこで、学び合いやプロジェクトでの協働的な作業などをうまく組み合わせていくことが重要になります。本稿では、特に「学びの個別化」「学びのプロジェクト化」の実践を紹介します。

英語科における「学びの個別化」の例

私が勤務している横浜創英中学・高等学校では、生徒一人ひとりが、学び方を選ぶことができるカリキュラムづくりに着手しました。そのフラッグシップとして、中学校の英語の授業は学年やクラスを超えて、学び方を選べるようにしました。具体的には、中学１～3年生の３学年が時間割の同じ時間に異学年で英語を学びます。そこには、「先生が教える教室」「友だちと学び合う教室」「AIなどを使って個で学ぶ教室」「外部の講師から学ぶ教室」といった学び方があり、子どもたち自身が選択していくのです。

例えば、「先生が教える教室」では主に日本人が文法を教えたり、ネイティブの先生がコミュニケーションの授業を行ったりしています。予め、内容を生徒に伝えてあるので、それを先生から教わりたければ、学年を問わず参加することができます。授業の中で、飛び級や留年が何度でもできるイメージです。また、教科書を使った学習についても、自律的に学べるように教科書本文のサイトトランスレーション（意味のかたまりごとの日本語訳）や、文法解説動画などの資料は学校のウェブサイトから自由に閲覧したり、ダウンロードできるようになっており、生徒は自分のペースで学べるようになっています。来年度以降はコミュニケーションのやり取りの部分を補うために、AIによる対話学習や海外の同学年の生徒との交流に加え、レベル別のアクティブ・ラーニング型のコミュニケーションに特化した授業も考えています。

このように、生徒たちは、中間・期末考査や音読テストといった教師から与えられた目標を持つと同時に、将来英語をどのように使いたいか、英語を使って自分の人生をどのように豊かにするか、といった個人の目標を立て、そこに向かって日々の授業を選択し、自律的に学んでいきます。

英語科における「学びのプロジェクト化」の例

一方で、上記のような学びは一人でもできるため、前述したような「放任」や「学習の孤立化」が起きる恐れがあります。「友だちと学び合う教室」を作ったのはそれを防ぐ意味もあります。そこでは、英会話やプレゼンテーションの練習をし合ったり、問題を出し合ったり、中にはホワイトボードを使って授業を始める生徒もいます。学年も混合なので、中学３年生の生徒が下級生に教えている姿もみられます。

新しい*NEW CROWN*の１年Project 2に、「理想のロボット選手権」という活動があります。このような複数のLessonのまとめにあるProjectをうまく利用するとよいでしょう。協働的に作業をしながら活動に取り組むことで、それぞれの生徒の学力に合った活動を行うことができます。また、定期的にプロジェクトを実施することで、プロジェクトを一つの指標として、「学びの個別化」とのサイクルが生まれることも期待できます。

これからの授業で求められること

これからの子どもたちに付けさせたい力の一つは「誰かに頼る力」です。「学びの個別化」でつまずいたり、「学びのプロジェクト化」で共通の目標に向かったりする時に、自然に協働することができるようになる場を作っていくのがこれからの授業の大きな役割です。新しい*NEW CROWN*を使って、ぜひ「学びの個別化」「学びの協働化」「学びのプロジェクト化」の観点を取り入れていただければと思います。

自律的な学び

自律的な学習をサポートする For Self-studyとデジタルコンテンツ

水本 篤
（関西大学）

*NEW CROWN*で行っている自律的な学習者を育てる工夫

2021年度から実施されている学習指導要領では、単語数が大幅に増えて、中学校で指導されている先生からも「教えなければならない単語が多すぎる」という声が聞かれる。新しい*NEW CROWN*では、「理解できればよい」とされる「受容語彙」と、能動的な使用が求められる「発信語彙」を明確に区分して掲載するだけでなく、自律的な学習を支援するためのさまざまなリソースを提供している。具体的には、学び方を学ぶFor Self-study、教科書の二次元コードや学習者用デジタル教科書からアクセスできるデジタルコンテンツ、そして教科書巻末に収録された資料などがこれに該当する。これらはすべて、生徒たちが独自に学習内容を深めるための手段として重要な役割を果たすことが期待される。本稿では、For Self-studyとデジタルコンテンツを紹介し、それらの活用方法や理論的背景を説明する。

For Self-study

For Self-studyは、様々な資料を活用し、自ら学び、思考を拡げ、学びを深めることで自律的な学習者を目指すことを目的とする。For Self-studyのセクションには、以下のように学年ごとに異なる内容が配置されている。また、各学年の教科書巻末には「二次元コードの使い方」の説明も追加され、これにより*NEW CROWN*が自律的な学習者を育てるという目的で作成されていることがよくわかる。

1年	2年	3年
1. 中学校で学ぶこと	1. 教科書の上手な使い方	1. 英語に向き合うコツ
2. 単語の意味の調べ方	2. 使える単語を増やそう	2. 単語の覚え方
3. 使える単語を増やそう	3. リスニングのコツ	3. 英語で表現するときに…
4. 音読のコツ	4. 英語の文章構成	4. これからの外国語学習
5. 日本語から英語へ		

注目すべき点は、3学年の教科書に共通して、単語の覚え方や使える単語を増やす方法が示されていることである。ここで取り上げられている学習方法は、語彙の学習ストラテジー研究で効果的であると認められているものばかりである。また、辞書の使い方（単語の意味の調べ方）も1年次に紹介されており、生徒が自力で語彙を学ぶための効果的な方法として導入されている。

Nation (2008)は、語彙指導を考える際に、直接的な語彙指導の優先順位を低く設定し、次のような順番での重要度を主張している。(1) 指導する語彙の計画、(2) ストラテジー指導、(3) 語彙のテスト、(4) 直接的な語彙指導。このアプローチの背景には、教師が直接教えられる語彙の量が限られている現実を踏まえて、指導する語彙の計画やストラテジー指導などを優先することで、より成果を上げられるという考えがある。また、学んだ語彙が必ずしもすぐに定着するわけではなく、覚えた後に思い出すプロセスが重要となる。これは、中学校や小学校の英語教科書で学ぶ単語についても同様であり、授業で全ての単語を指導し、完璧に練習するのは現実的に困難である。このような状況の中で、いずれかの段階で語彙の学習ストラテジーの指導を取り入れる必要がある。*NEW CROWN*はFor Self-studyのセクションを設けることで、生徒と教師双方にこのようなメッセージを伝えている。

デジタルコンテンツ

二次元コードや学習者用デジタル教科書を使用することで、以下のような多様なコンテンツを活用できるようになっている。

1. 発音：発音を採点し、アドバイスを参考にしながら発音練習。
2. 単語：フラッシュカードを使用した単語の反復練習。
3. 基本文：基本文を用いた、単語置き換えによるドリル練習。
4. 辞書：『ジュニアクラウン英和辞典』を活用した語彙の意味や用例の学習。
5. 文法解説動画：基本文の文法事項や文構造を解説する動画の視聴。
6. 資料動画：題材に関連する資料映像や言語活動のモデル動画の視聴。
7. 本文：アニメーションや文字を見ながらの音声聞き取り、カラオケ機能を活用した音読練習、イラストを活用したリテリングの練習。

教師はこれらのコンテンツを授業内で音声やフレーズの提示、ポーズ読み、新出語句のマスキングなど、様々な方法で活用できる。また、授業外でもこれらのコンテンツは、単語やフレーズ、基本文の音声聞き取りや授業の予習・復習に使用でき、自律的な学習をサポートする。例えば、授業内で指導した言語材料等を生徒に復習させたいときは、基本文を確認し、文法解説動画を活用することで、文法の明示的な学習もサポートできる。その他にも、単語や文法事項をドリル形式の問題で自習できるようになっている。

これだけでも十分な学習・指導サポートだが、*NEW CROWN*のデジタルコンテンツには、発音チェックや辞書機能などの新たなツールが組み込まれている。発音チェックでは、生徒が自身の発音を録音し、採点とアドバイスを受けることで発音練習を行える。さらに、三省堂が発行する『ジュニアクラウン英和辞典』を収録し、さらに語彙を拡げるための導線も提供されている。

教師のサポートは自律的な学習を促進する上で欠かせない要素である。新しい*NEW CROWN* では、これらの充実したコンテンツを二次元コードと学習者用デジタル教科書で提供し、教科書を中心とした指導や学習のサポートを行うことができる。ぜひ、これらを活用し、自律的な学習者の育成に役立てていただきたい。

出典：Nation, P. (2008). *Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. Thomson Heinle.

教科横断的な学び

なぜ他教科との連携か？

信田 清志
（ロンドン日本人学校）

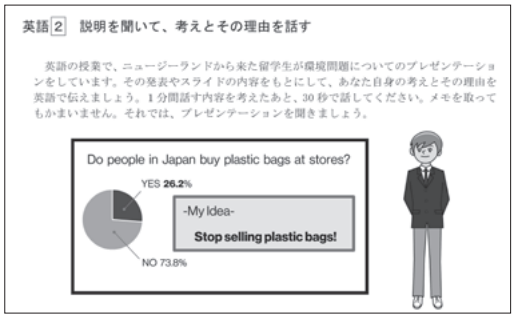
1.「カリキュラム・マネジメント」について

令和3年（2021年）に実施された中学校学習指導要領では、「カリキュラム・マネジメント」について、以下のように示されている。

> 各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、**教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと**、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、**教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと**（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする（※下線筆者）

この学習指導要領が告示された後の平成29年（2017年）6月・7月に開催された小・中学校新教育課程説明会（中央説明会）では、全国都道府県政令市教育委員会指導主事を対象に行政説明がなされた。説明では、**「何ができるようになるか」**は、**「どのように学ぶのか」**とも緊密につながっているとされ、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実には、学習者が「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」を通して学んでいくこと（＝「どのように学ぶのか」）が重要であるということも強調されていた。このことは、言い換えると、指導者（教員）中心で知識を伝達する授業観から教員自身が脱却し、学習者が主体的に学ぶことに関心を抱き、人物や文献等との対話を通して、学びそのものを深めるような、学習者主体の授業観への転換が必要であるということを示しているといえる。また、「何ができるようになるか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」の3つの視点の中心に、「社会に開かれた教育課程」「各校におけるカリキュラム・マネジメントの実現」が置かれていることを考えると、その位置づけの重さをうかがい知ることもできる。

2.「令和5年（2023年）度　全国学力・学習状況調査」とカリキュラム・マネジメント



令和5年（2023年）4月に実施された全国学力・学習状況調査では、カリキュラム・マネジメントの3つの側面で示された「教科横断的な視点」を反映した問題が、「話すこと」の領域で出題された（左下図）。この問題の出題背景を、『令和5年度全国学力・学習状況調査報告書中学校英語』（以下、報告書）で示されている「分析結果と課題」等を参考に説明する。

まず、学習指導要領の「改訂の考え方」の「何ができるようになるか」の部分は、「社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すことができる」ことである。具体的な英語の運用でいうと、話し手の意見に対する自分の考えを伝える場合、賛成なら「I agree with you. の後に理由を付け加える」ことや、反対なら「I don't agree with you because ... と理由を述べる」ことが想定される。

「何を学ぶのか」については、学習指導要領で示されている「話すこと［やり取り］」の目標「ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うこと」に相当し、「どのように学ぶのか」は、「主体的・対話的で深い学び」が実践された授業を通してそのような力を育むことと解釈される。

つまり、普段の授業で学習指導要領に準拠した授業実践を積み重ねていけば、順当に解答できる設問としてこの問題が設定されていることが分かる。社会的な話題である「レジ袋」の題材は、理科の「見方・考え方」にある「自然環境の保全に寄与する態度を養う（第2分野）」と関連させたり、技術・家庭科の「見方・考え方」にある「技術が生活の向上や産業の継承と発展、資源やエネルギーの有効利用、自然環境の保全等に貢献していることについても扱うものとする（技術分野）」と関連させたりして、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが想定されていたと考えられる。しかし、実際はそうではないようだ。国立教育政策研究所の「報告書」では、分析からうかがえる結果と課題として、以下のようにコメントがされている。

> （この設問の）正答率は 4.2%である。社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すことに課題がある。英語「話すこと」調査問題に関する質問に「聞いたことを理解し、話す内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった」と回答した生徒は、41.1%である（下線筆者）。解答類型6（※「条件① 話し手の意見に対する自分の考えを伝えている。」「条件② ①の理由について伝えている。」を満たさないで解答しているもの）の反応率が 50.0%と高いことからも、自分の考えやその理由を話すための基本的な表現が身に付いていないことが考えられる。

「指導と評価の一体化」・「他教科との連携」と「生徒の英語力」について、私たちが着手しなくてはいけない課題は、まさにここで示されていることだと捉えているのは私だけだろうか？

出典：国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査」（https://www.nier.go.jp/23chousa/kekkahoukoku/）

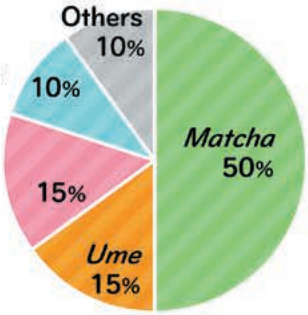
ユニバーサルデザイン　だれもが学びやすい教科書の工夫

年齢や性別、障がいの有無や能力を問わず、できるだけ多くの人が利用しやすい教科書となるように、専門家の校閲のもと、書体や色の組み合わせなどに配慮しました。

●読みやすく、書きやすい書体を採用

読みやすさを重視した、ユニバーサルデザインに配慮した書体を使用しています。

●可読性や視認性への配慮



色だけが識別の手がかりにならないように、記号や番号、文字などで補足しました。

それぞれのパーツが明確に識別できるように、色の濃淡を工夫したり、白色などの囲み線を加えたりしています。

登場人物　魅力的なキャラクター

07NCでは、個性的で国際色豊かなキャラクターたちと一緒に、身近なことや日常的な話題、社会的なテーマなどを通して英語を学んでいきます。

Hana

わかば市出身。3歳からサッカー一筋。

Riku

わかば市出身。時間があればギターを練習している。

Kate

オーストラリア出身。写真と旅行が趣味。

Mark

アメリカ出身。陽気で、クラスのムードメーカー。

Jing

中国出身。ダンスが得意で、アニメが好き。

Dinu

インド出身。中1の4月に来日。将来の夢は映画監督。

Ms. Brown

イギリス出身。わかば中学校のALT。

Mr. Oka

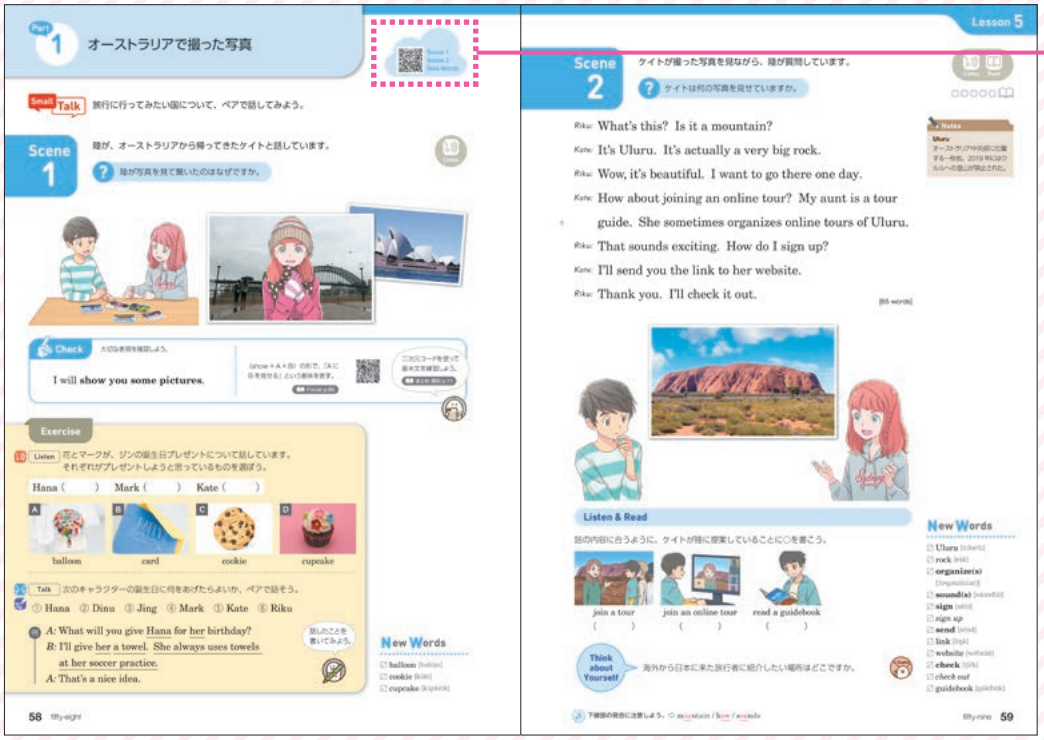
わかば市出身。妹はわかば小学校で教師をしている。

キャラクターデザイン・イラストレーション：箕星 太朗

デジタルコンテンツ

いつでもどこでも活用できるコンテンツ

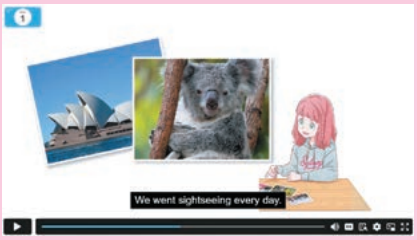
紙面上のQRコードを読み取ると、そのページの学習に役立つさまざまなコンテンツを使うことができます。



ここからデジタルコンテンツをご覧いただけます

●本文アニメーション

PartのScene 1〜2のアニメーションを視聴することができます。



●基本文のドリル

「聞く➡くり返す➡言う」の3ステップで、基本文を練習することができます。

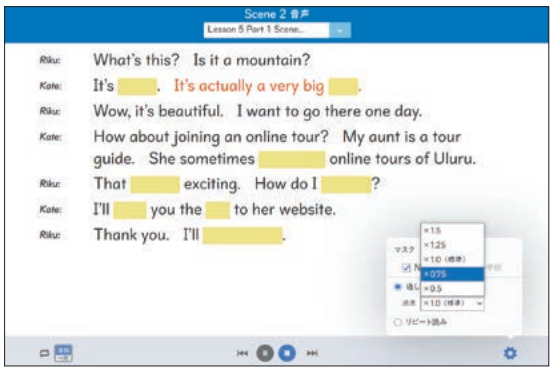
●新出語句の音声・練習

音声を聞いたり、フラッシュカードを使って練習したりすることができます。

●りな先生の解説動画

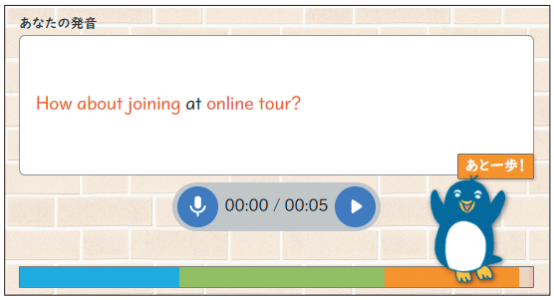
基本文の文法事項や文構造を解説する動画を視聴することができます。

本文の音声とテキスト



英文や語句・表現にマスキングをしたり、音声のスピードを調節したりしながら、Scene 1〜2の本文をくり返し聞くことができます。

発音チェック

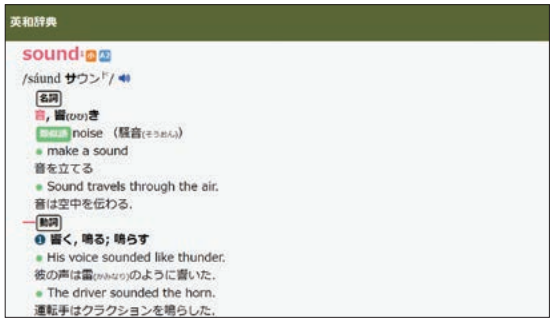


教科書の本文や基本文を音読した音声を、AIが3段階で判定します。モデルの音声やアドバイスを参考に、聞き手に伝わる発音を目指して練習することができます。

題材の資料映像・モデル動画

教科書の題材に関連した動画を見ることができます。発表を行うGoal ActivityやProjectでは、発表を実演したモデル動画を見て、話し方や伝え方の工夫を確認できます。

英和辞典



『ジュニアクラウン英和辞典』から、小学校や中学校で触れる語句・表現を含む4,500語以上の見出し語を収録しています。

主なデジタルコンテンツ

Lesson	Part	●本文アニメーション ●本文や新出語句の音声 ●基本文のドリル ●単語の練習 ●発音チェック
	Goal Activity	●「書くこと」のモデル動画 ●「発表」のモデル動画
Language Focus	●りな先生の解説動画	
Take Action! Listen	●Listenの音声	
その他	●英和辞典 ●題材の資料映像 ●筆順アニメーション ●発音図鑑 ●英語落語の動画	

※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。 ※環境等によっては、通信料が発生する場合があります。 ※収録予定内容には、今後変更が生じる可能性があります。

デジタル教科書・教材のご案内

学習者用デジタル教科書

デジタル教科書からQRコードコンテンツが利用でき、
タブレット端末での教科書の学びがさらに深まります。

Lentrance

※Lentranceは、株式会社Lentranceの登録商標です。

令和7年度版*NEW CROWN*のデジタル教科書・教材は、Lentrance Readerで提供します。教科書を刊行する複数の出版社が採用し、多くの児童・生徒に使われているビューアです。
特別支援機能で、すべての生徒が安心して利用できます。

体験版

https://tb.sanseido-publ.co.jp/07ncpr/digital/

指導者用デジタル教科書（教材）

授業準備の負担軽減と、
スムーズな授業展開を支援します。

好評の機能をリニューアル！授業プランの機能を搭載し、豊富なコンテンツをテンポよく呼び出せます。
紙面から、授業プランから、使いやすい方法で授業を展開することができます。

CONTENTS　もくじ

令和7年度版 *NEW CROWN*の改訂のポイント

02 小中連携　酒井 英樹
06 レッスン構成　津久井 貴之
10 書くこと・話すこと[発表]　工藤 洋路
12 話すこと[やり取り]　今井 裕之
14 聞くこと・読むこと　臼倉 美里

令和7年度版 *NEW CROWN*の指導例

16 小中連携　坂本 南美／根岸 雅史
18 単元計画　宮﨑 直哉／樫葉 みつ子
20 Part　中島 真紀子／田中 武夫
23 題材紹介①　松宮 奈賀子／亘理 陽一／佐藤 臨太郎／大島 希巳江
24 Small Talk Plus　駒澤 正人／日墨 滋之
26 Goal Activity　興津 紀子／鈴木 祐一／松沢 伸二／竹内 理
30 Take Action!　田嶋 美砂子／鈴木 悟／金丸 紋子／中西 浩一／重松 靖
35 題材紹介②　橋本 健一／佐々木 顕彦／坂本 ロビン／横川 博一
36 Project　奥住 桂／Thomas Hardy
38 ディスカッション　谷口 友隆／Matthew Miller
40 学びの個別最適化　山本 崇雄
41 自律的な学び　水本 篤
42 教科横断的な学び　信田 清志

令和7年度版 *NEW CROWN* ウェブサイト

内容解説資料や編修趣意書、各種資料、デジタル教科書（教材）の体験版など、様々な情報を掲載しております。

主な資料

- 内容解説資料
- 指導・学習内容一覧
- 別冊 しくみと使い方
- 別冊 小中連携
- 教師用指導書ダイジェスト　など

https://tb.sanseido-publ.co.jp/07ncpr/

三省堂
〒102-8371
東京都千代田区麹町5-7-2

TEN TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号
2024年4月1日発行
○編集・発行人：瀧本多加志
○発行所：株式会社 三省堂　○印刷所：三省堂印刷株式会社
三省堂